

# イブン・ハルドゥーン自伝8

訳・註・中村妙子  
柳谷あゆみ  
橋爪烈  
註・佐藤健太郎  
五十嵐大介

## 凡例

1 本稿は、『イスラーム地域研究ジャーナル』に連載中の以下の訳稿の続編である。

柳谷あゆみ・阿久津正幸・中町信孝・橋爪烈・原山隆広・吉村武典・高野太輔・佐藤健太郎・五十嵐大介・湯川武・茂木明石・中村妙子訳註「イブン・ハルドゥーン自伝1-7」『イスラーム地域研究ジャーナル』一七、二〇〇九—二〇一五年、四五—五八、三五—五六、四七—七二、六五—九八、七七—一〇二、三一—四九、四〇—五六頁（以下、「イブン・ハルドゥーン自伝」と略記）

2 翻訳の底本は、以下のイブン・タウウィートによる校訂版を用いた。

Ibn Khaldūn, *al-Ta'rif bi-Ibn Khaldūn wa rihlat-hu gharban wa sharqan*, ed. Muhammad ibn Tawfī al-Tanjī, Cairo: Matba'at Lajnat al-Ta'rif wa al-Tarjama wa al-Nashr, 1951（以下「*al-Ta'rif*」と略記）

また、翻訳にあたっては以下のフランス語訳を適宜参照した。

Ibn Khaldūn, *Le Livre des exemples. T.I Autobiographie, Muqaddima*, tr. Abdesselam Cheddadi, Paris: Gallimard, 2002（以下「*Autobiographie*」と略記）

3 イブン・ハルドゥーンの『歴史序説』および彼の史書『省察すべき実例の書』は、彼の自伝を読み解くうえで参考になるところが多い。主に使用したのは、以下の校訂版および日本語訳である。

Ibn Khaldūn, *Tārīkh Ibn Khaldūn al-musammā bi-Kitāb al-'ibar*, 7 vols., Beirut,

1971（ブーラーク版のリプリント。以下、「*al-'ibar*」と略記）

*Prolegomènes d'Ebn Khaldoun: texte arabe publié d'après les manuscrits de la Bibliothèque impériale*, ed. M. Quatremère, Paris, 1858（以下「*Prolegomènes*」と略記）

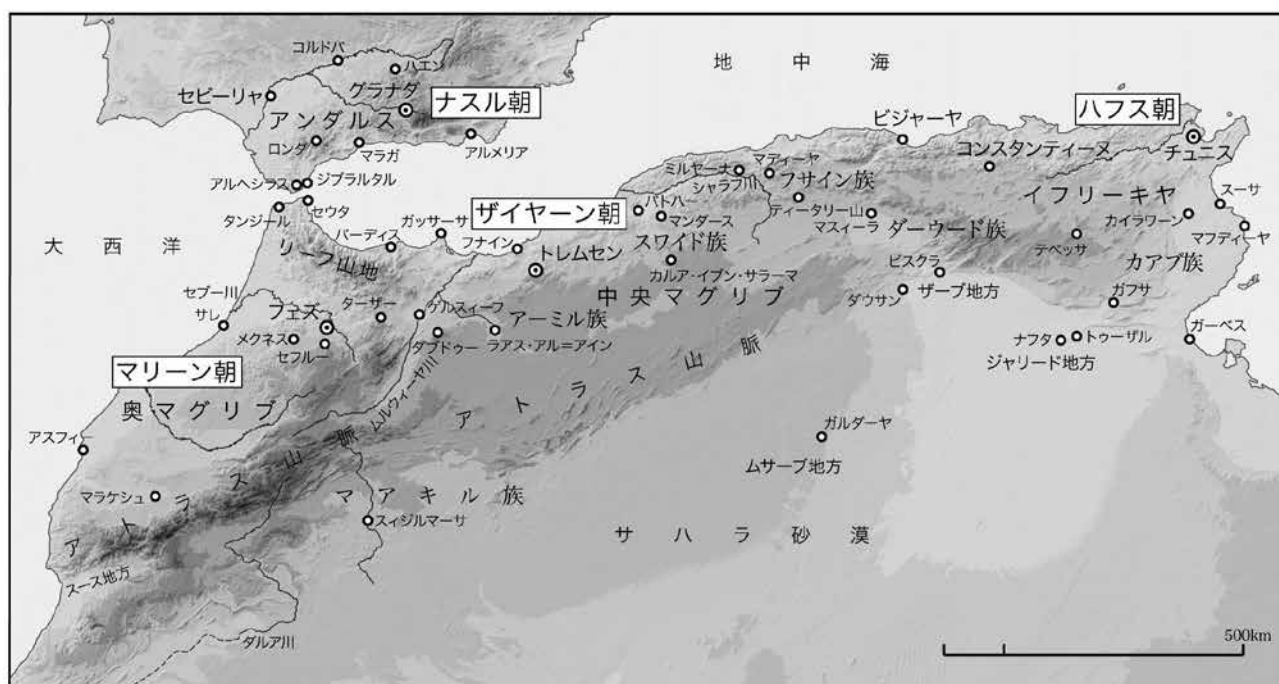
イブン・ハルドゥーン著、森本公誠訳『歴史序説』全四巻、東京：岩波書店（岩波文庫）、二〇〇一年（以下、『歴史序説』と略記）

4 訳文と原文の対照がしやすいよう、訳文中に「p.002」などとして校訂版のページの切れ目を示した。

5 年代は、訳文ではアラビア語原文のヒジュラ暦表記を西暦に換算した上で、ヒジュラ暦／西暦の形式で記した。一方、註では必要な場合を除いて西暦のみ記した。ヒジュラ暦を西暦に換算する際、年代を決定しがたい場合には「六八五／一二八六—七」とした。

6 訳文中の括弧のうち、「」は訳者による語句の補足、「（）」は簡単な語彙の説明や言い換えである。また、「『』」は書名を示す。【】は訳註者が付け加えた小見出しである。詩や長文にわたる引用は、一段下げて記した。

7 アラビア語のカナ表記は大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』東京：岩波書店、二〇〇二年の方式に拠った。また、クルアーンの引用はカイロ版の章節番号に従い、日本語訳は原則として井筒俊彦訳『コーラン』全三巻、東京：岩波書店、一九六四年を用いた。



14世紀のマグリブとアンダルス

//p.216//

再び奥マグリブへ<sup>①</sup>

【ビスクラからフェズへの移住】

以前に詳しく述べたように、私は、マグリブの王、「マリーン朝」スルターン・アブドゥルアズィーズ<sup>②</sup>に協力して行動していた。私は当時ビスクラに滞在していて、その支配者アフマド・イブン・ユースフ・イブン・ムズニー<sup>③</sup>の保護下にあった。彼はリヤーフ族の手綱を握っている人物で、スルターンからリヤーフ族へ支払われる報酬の多くはイブン・ムズニーが負担しており、ザーブの税の中からまかなっていた<sup>④</sup>。リヤーフ族は自分たちのことの多くをイブン・ムズニーに頼っていた。このような状況の中で、私とイブン・ムズニーは、気がつかないうちにアラブ遊牧民を従えることをめづって張り合うようになっていた。そのためにイブン・ムズニーは心の内に怒りをかかえて、私に対して憶測や疑いをめぐらせてはそれを自分で正しいと信じ込み、私を中傷する者たちが耳に入れた噂や作り話を真に受けて、彼の胸は煮えたぎったのである。そこでイブン・ムズニーはこの件について、深くため息をつきながら、スルターンの側近で助言者でもあるワナズマール・イブン・アリーフ<sup>⑤</sup>に手紙を書き送り、ワナズマールはその内容をスルターンに告げた。スルターンはただちに私を召し出したので、「七」七四年の高貴なる預言者生誕祭の日（ラビーウ・アウワル月一二日）／一三七二年九月一日、私は妻子とともにビスクラからスルターンのところにむかって出発した。

その時すでにスルターンは病にかかっていた。私が中央マグリブ地域のミルヤーナに到着してはどなく、スルターンが逝去し<sup>⑥</sup>、//p.217//息子のアブー・バクル・サイード<sup>⑦</sup>がワズイール・アブー・バクル・イブン・ガーズイー<sup>⑧</sup>の後見を得てその後継者に擁立され、フェズに急ぎ進むべく奥マグリブへむけて出発したという知らせが届いた。そのときミルヤーナには、スルターンの将軍でマリーン家の子飼いの家来のアリー・イブン・ハッスーン・イブン・アビー・アリー・ヤナーティーがいた。私は彼とともにアッターフ族のもとへむけて出発し、そのアミールであるヤアクーブ・イブン・ムーサー家<sup>⑨</sup>のもとに逗留した。この家の何人かが、スワイド族のアミールであるアリーフ家<sup>⑩</sup>の宿营地に到るまで同行して私を護衛してくれた。

数日後アリー・イブン・ハッスーンが自らの軍隊をともなう私たちに追いついたので、私たちは揃ってマグリブへ出て出発し、砂漠の道を進んだ。

一方、「ザイヤーン朝の」アブー・ハンム<sup>11</sup>はスルターンの死後、砂漠の中にある撤退先のティーグラーリー<sup>12</sup>から、すでにトレムセンへと戻っており、トレムセンと自分の旧領のすべてを「回復して」支配していた。そこでアブー・ハンムは、マアキル族に属するウバイドウッラー族のシャイフであるヤグムール家<sup>13</sup>に指示して、<sup>14</sup>「彼らの土地の境界にあるザル川」の水源に位置するラース・アル・アイン<sup>15</sup>で「待ち伏せて」私たちの行く手を阻むよう仕向けた。ヤグムール家は指示通り私たちの前に立ちだかった。馬に乗ってダブドゥー山<sup>16</sup>に逃れることのできた者もいた。しかし、私も含めて多くの者が馬を奪われて徒となり、持ち物をすべて略奪された。私は身ぐるみはがされたまま日に曝されて二日間その砂漠をさまよったが、やっと人里にたどり着くことができ、ダブドゥー山にいた仲間たちと合流した。その間には、形容しがたく、感謝しきれない神の恩寵があった。

その後私たちはフェズへむけて進んだ。この年（七七四年）のジュマードー月／一三七二年一〇月―十二月にフェズに着くと、私はワズィール・アブー・バクルとその父方の従兄弟のムハンマド・イブン・ウスマーン「・イブン・カース」<sup>17</sup>を訪れた。私とムハンマド・イブン・ウスマーンとの間には親しく友好的な古いつきあいがあったが、それはフェズの王権を求めてアンダルスから海を渡りサファイーハ山に拠点を置いていた「マリーン朝」スルターン・アブー・サーリムのもとへ、ともに赴いたとき以来のことである。このことは、本書の別の場所ですべてとおりである<sup>18</sup>。アブー・バクルは、ワズィールらしい親切さと気前のよさを私に示し、予想を超える多くの俸給とイクターで厚遇してくれた。私は彼らの王朝の中でしかるべき立場に就いた。人々からは愛でられ、地位は高く、威厳は広く知れ渡り、スルターンのマジユリスでは褒め讃えられた。

#### 【マリーン朝スルターン・アブー・アッバースの権力獲得】

その後、冬が終わった頃、ワズィール・アブー・バクル・イブン・ガーズィーと<sup>19</sup>「ナスル朝」スルターン・イブン・アフマルとの間で諍いが起こった。それはイブン・アフマルがイブン・ハティーフをマリーン朝の宮廷から遠ざけるよう要求したからであった<sup>20</sup>。ワズィールはこのことを拒絶

したため二人の間の雲行きが怪しくなった。ワズィールは、アンダルスを攻めるためにアフマル家の親族の何人かを用意し始めた。一方、イブン・アフマルの方でも、スルターン・アブー・アリーの子孫でアミールのアブドゥッラフマーン・イブン・アビー・イファッル・サン<sup>21</sup>とワズィールのマスウード・イブン・ラッファ・イブン・マーサーイ<sup>22</sup>の二人の解放を急いで行なった。この二人の投獄は、「マリーン朝」スルターン・アブドゥルアズィーズの時代に、アンダルスでワズィール職にあったイブン・ハティーフがスルターン・アブドゥルアズィーズの示唆を受けて行なったものであった<sup>23</sup>。

今、イブン・アフマルは二人を解放し、マグリブの王権を要求させるために彼らを派遣して艦隊に乗せ、ガッサーサ<sup>24</sup>の海岸へ渡らせたのである。彼らはそこで船を降り、バットゥーヤ諸族と合流した。バットゥーヤ諸族は彼らを保護し、アミール・アブドゥッラフマーンの支配に服すると宣言した。これを受けてイブン・アフマルはアンダルスの軍隊を率いてグラナダから出発し、ジブラルタル<sup>25</sup>を包囲する陣を敷いた。このことについての知らせが、マリーン朝の国事を取り仕切っていたワズィール・アブー・バクル・イブン・ガーズィーのもとに届いた。ワズィールは、ジブラルタルに置いている守備兵の援助をするために、ただちに父方の従兄弟のムハンマド・イブン・ウスマーン・イブン・カースをセウタに派遣した。<sup>26</sup>同時に自分はアミールのアブドゥッラフマーンと戦うために軍隊を率いてバットゥーヤ諸族のところへと赴いた。しかしそこでワズィールはアブドゥッラフマーンがすでにターザーを征服したのを知ったので、彼を包囲し、そこに滞陣した。

かつてスルターン・アブドゥルアズィーズは、父を同じくする兄弟、すなわち「スルターン」候補者となりうる若者たちを集めてタンジールに幽閉していた。ムハンマド・イブン・カースがセウタに現れたとき、彼とイブン・アフマルとの間で使者の往来があり、二人はそれぞれ互いに相手のしたことを非難した。イブン・アフマルは、彼ら（マリーン朝の人々）が、王位にふさわしい人物をさしおいて、齒も生え揃わぬ幼児であるサイード・イブン・アブドゥルアズィーズを擁立したことを激しく非難した。ムハンマドはイブン・アフマルの言い分を認め、自分の主張を取り下げた。そこでイブン・アフマルは、ムハンマドに圧力をかけて、タンジールに幽閉されていた「マリーン家の」息子たちの中の一人に忠誠を誓わせようとした。一方、これに先立って、ワズィール・アブー・バクルもムハンマドに対して同様に、もし事態がアミール・アブドゥッラフマーンゆえに自分にとって面倒なものに



なるのであれば、これらの「マリーン家の」息子たちのうちの一人への忠誠の誓い<sup>バ</sup>をすることによって状況を打開するようにと、指示をしていた。

ムハンマド・イブン・カースはかつて、スルターン・アブー・サーリムの治世に、スルターンから息子「アブー・アッバース・」アフマド<sup>22</sup>のワズィールに任じられたことがあった。そこでムハンマドはただちにタンジールへと急ぎ、「アブー・アッバース・」アフマド・イブン・スルターン・アブー・サーリムを幽閉先から解放し、彼に忠誠の誓い<sup>バ</sup>をして、彼を伴ってセウタに向けて出発した。「セウタに着くと」ムハンマドはイブン・アフマルに手紙を書き、アブー・アッバース・アフマドの擁立を知らせるとともに、ジブラルタルを明け渡すことを条件に支援を要請した。そこでイブン・アフマルは要望通りの資金と兵をムハンマドに提供し、<sup>22</sup>自らはジブラルタルを占領して守備兵を置いた。「アブー・アッバース・」アフマド・イブン・スルターン・アブー・サーリムはかつて、ともに幽閉されていた父を同じくする兄弟たちとの間で、自分たちの中で王権を手にした者が残りの者をアングルスへ渡らせることを互いに約束していた。そこでアブー・アッバース・アフマドは忠誠の誓い<sup>バ</sup>を受けると、この約束を果たすこととして彼らをみな「アングルスへ」渡らせたのである。彼らがスルターン・イブン・アフマルのもとへ到着すると、イブン・アフマルは彼らを歓待し、たくさんのお金を与えた。

このことすべての報告が、ターザーでアミール・アブドゥッラフマーンを包囲していたワズィール・アブー・バクルのところに届くと、彼は父方の従兄弟（ムハンマド・イブン・カース）の行動を聞いて激情にかられた。ワズィールは王都（フェズ）にむけて戻ろうと、陣を引き払い、軍隊を郊外の花嫁の丘<sup>23</sup>に駐留させた。そして父方の従兄弟のムハンマド・イブン・ウスマーン「・イブン・カース」を叱責した。するとムハンマドはワズィールの指示に従ったまでだと言いつつしたので、ワズィールは怒り、また叱責した。こうして両者の間の亀裂が深まった。そこで、ムハンマド・イブン・ウスマーン「・イブン・カース」は、彼が擁立したスルターン（アブー・アッバース・アフマド）とアングルスからの援軍とともに出発し、ついにメクネスをのぞむザルフーン山<sup>24</sup>に到着した。彼はそこに陣を張り、その地の人々は彼を受け入れ保護した。そこでワズィール・アブー・バクルは彼らにむけて軍隊を進め、「ザルフーン」山に登ったが、彼らはワズィールを迎え撃ち、打ち負かした。その結果、ワズィールは王都郊外の自陣に戻った。

一方、これに先立って、スルターン・イブン・アフマルはムハンマド・イブン・ウスマーン「・イブン・カース」に対して、アミール・アブドゥッラフマーンに助力と支援を求め、<sup>22</sup>マグリブの地域のうちのかんりの部分を彼と分けあい、彼にその地を支配させるようにと助言していた。そこでムハンマド・イブン・ウスマーンはアミール・アブドゥッラフマーンと連絡をとり、呼びかけて支援を求めた。

他方、マリーン朝の父祖の代からの側近であるワナズマール・イブン・アリーフとワズィール・アブー・バクルとの間の雲行きはすでに怪しくなっていた。ワナズマールは、ターザーを包囲しているワズィールにアミール・アブドゥッラフマーンと和平を結ぶように要求したが、ワズィールはそれを拒否し、ワナズマールを捕える決心をした。彼はワナズマールがアミール・アブドゥッラフマーンに好意を抱き、意を通じていると疑ったからである。ワナズマールの目たち（密偵）の一人がこのワズィールの動きをひそかに彼に知らせた。そこで、ワナズマールはその夜のうちに馬を走らせ、マアキル族に属するアフラーフ諸族<sup>25</sup>に合流した。アフラーフ諸族は、アミール・アブドゥッラフマーンに与っていた。彼らのところにはワルターッジャン家の有力者アリー・イブン・ウマル・ワイアラニー<sup>26</sup>がいた。彼は以前ワズィール「アブー・バクル・」イブン・ガーズィーに対して反乱を起こして、スース<sup>27</sup>に逃れていたが、その後砂漠を通過してアフラーフ諸族のところへやってきて、彼らの間に居を定め、アミール・アブドゥッラフマーンの支配に服するよう呼びかけていたのである。

ワナズマールはワズィール・アブー・バクルの追っ手から逃れてアフラーフ諸族のところに着き、今まで通りにアミール・アブドゥッラフマーンを支持するようさらに煽りたてた。しばらくしてスルターン「アブー・アッバース・」アフマド・イブン・アブー・アブドゥッラフマーンの使者が彼らのところに届いた。さらにアミール・アブドゥッラフマーンはターザーから出て、着して召集をかけた。アミール・アブドゥッラフマーンはターザーから出て、彼らと合流し、彼らの部族の間に宿営した。そして彼らはみなスルターン・アブー・アッバースを支援するために出発し、セフルー<sup>28</sup>に到達した。その後<sup>23</sup>各々の方角からやってきたそれぞれ「の勢力」がナジャー川<sup>29</sup>で集合し、協定を結んで翌朝には戦さの支度を整えた。

ワズィール・アブー・バクルは彼らと戦うべく出撃したがかなわず、負け

て逃げ戻り、新フェズ<sup>②</sup>に立てこもった。寄せ手は、ワズィールを包囲するために花嫁の丘に陣を張った。これは、「七」七五年の断食明けの祭の期間（一三七四年三月）であった。三ヶ月間の包囲の結果、身動きがとれなくなつて疲弊したワズィールらは、ついに、擁立された幼児すなわちサイード・イブン・スルターン・アブドゥルアズィーズを廃位することと彼の父方の従兄弟スルターン・アブー・アッバースの所に出て忠誠の誓い<sup>③</sup>をすることとを条件とする和平を受け入れた。スルターン・アブー・アッバースとアミール・アブドゥッラフマーンは、すでにナジャー川の会合において協力と援助についての協定を結んでいたが、その条件は、全マグリブ地域の王権はスルターン・アブー・アッバースに属し、スイジルマールサ<sup>④</sup>とダルア川流域<sup>⑤</sup>の地と、スルターン・アブー・ハサンの兄弟でアミール・アブドゥッラフマーンの祖父であるスルターン・アブー・アリーのものであった土地はアミール・アブドゥッラフマーンに属するといふものであった。その後、<sup>⑥</sup>まだ包囲が続いている間に、アミール・アブドゥッラフマーンはこの協定に関して考えを変え、さらにマラケシュとその周辺をも要求した。スルターン・アブー・アッバース側の人々は勝利を確実に手にするために彼の要求を大目に見て、このことに合意した。

スルターン・アブー・アッバースとワズィール・アブー・バクルとの間で和平が結ばれ、ワズィールは新フェズからスルターン・アブー・アッバースのところへ出て、彼が擁立した幼児のスルターンを廃した。スルターン・アブー・アッバースは「七」七六年年初／一三七四年六月一二日に王都に入り、一方アミール・アブドゥッラフマーンはマラケシュへむけて大急ぎで出発した。このとき、スルターン・アブー・アッバースとそのワズィールのムハンマド・イブン・ウスマーンの二人は、アミール・アブドゥッラフマーン「との協定」に関して考えを翻した。そこで、彼らは軍隊を送つて彼のあとを追わせた。軍隊はバフト川<sup>⑦</sup>で彼に追いつき、日中のひととき彼と戦ったが、戦意を無くし、彼らの軍旗を掲げつつ引き返した。アミール・アブドゥッラフマーンはそのままマラケシュへ向けて進んだ。彼のワズィールのマスウード・イブン・マーサーイは暇を願い出てアンダルスへの渡航許可を求め、アミール・アブドゥッラフマーンから離れていった。そこでアミール・アブドゥッラフマーンは彼を送り出すと、自らはマラケシュへ向かい、そこを支配した。

#### 【マリーン朝の政変とイブン・ハルドゥーン】

私はと言えば、前に述べたように「七」七四年／一三七二年にワズィールのもとに到着して以来、王朝の保護と気づかいを受けてフェズに居住して、学問の研究と教授に従事していた。スルターン・アブー・アッバースとアミール・アブドゥッラフマーンが「フェズに」やつてきて、花嫁の丘に軍隊を駐留させると、法学者や書記、軍人などの王朝の人々は彼らの方へと「町から」出た。人々はみな、二人のスルターンのもとへ馳せ参じても許されるような状況で、何の非難も受けることはなかった。そこで私もみなと一緒に馳せ参じたのである。私とワズィール・ムハンマド・イブン・ウスマーン「・イブン・カース」との関係は前述した通りである。<sup>⑧</sup>ワズィールは、私に昔のよしみを大事にするという姿勢を示し、また多くのことを約束してくれていた。一方、アミール・アブドゥッラフマーンは私に好意を持ち、自分のことについて相談しようとは頻繁に私を召し出していた。このため、ワズィール・ムハンマド・イブン・ウスマーンは息が詰まる思いがしたので、自分のスルターン（アブー・アッバース）を焚き付けて私を捕えさせた。アミール・アブドゥッラフマーンがこのことを聞きつけて、ほかでもない自分が原因で私に災難が降りかかったことを知った。そこで彼は自陣を引き払うと誓つて、自分のワズィールのマスウード・イブン・マーサーイをこのために派遣した。その結果、私は翌日には解放された。

その三日後、両者（スルターン・アブー・アッバースとアミール・アブドゥッラフマーン）は別れた。スルターン・アブー・アッバースは王都に入り、アミール・アブドゥッラフマーンはマラケシュへむけて出発した。そしてその頃、私には居場所がなかったので、アミール・アブドゥッラフマーンに同行した。

私はアスフィールの海岸<sup>⑨</sup>からアンダルスへ渡ることを決意した。私はワズィール・マスウード・イブン・マーサーイに好意を持っていたので、彼に同行できるのではないかとあてにしていたのである。しかしマスウードがアンダルスに戻ったとき、私の方針は変わった。そこで私たちはアンダルスへ渡ることについて、フェズの支配者であるスルターン・アブー・アッバースへ取り次いでもらうために、ワナズマール・イブン・アリーフとゲルスィーフ地方<sup>⑩</sup>にある彼の居所で会った。私たちはそこでスルターンの召し出し人と出会い、彼とともにフェズへ向かった。ワナズマールはスルターンに私の渡航許可を求め、スルターンは許可を下したが、それは、ワズィール・ム

ハンマド・イブン・ウスマーン「・イブン・カース」やスライマーン・イブン・ダーウード・イブン・アララブ<sup>⑧</sup>や王朝の名士たちなどの反対にあつて先延ばしされたあげく、やっと下りた許可であつた。

「私の」弟ヤフヤー<sup>⑨</sup>は、「ザイヤーン朝」スルターン・アブー・ハンムーがトレムセンから去つたとき、アブー・ハンムーのもとを離れ、ミ<sup>ḥḥ</sup>ズグバ族の地からスルターン・アブドゥルアズィーズのところへと戻つた。そこでアブドゥルアズィーズと次いで擁立された息子のムハンマド・サイドヘ仕えることで身を落着かせた。スルターン・アブー・アッバースが新フェズを占領したとき、弟はトレムセンへ赴く許可を求め、認められた。スルターン・アブー・ハンムーのところに到着するとスルターンは以前通り弟を枢密文書取扱役に戻してくれた。私に「アンダルス渡航の」許可が下りたのはそのあとである。私はアンダルスへ出発した。落ち着きと静けさを求めていることであつたが、やがてこれから述べる事が起こるのである。

## 再びアンダルスに渡る。その後トレムセンへと向かい、アラブ諸族と合流して、アリーフ家のもとに逗留したこと

前述の通り、フェズの支配者であるスルターン・アブー・アッバースが私に対して冷たい態度を示し、そして私はアミール・アブドゥッラフマーンに同行して「フェズから」立ち去り、それから、落ち着いて世から身を引いて外部との接触を断ち学問研究三昧の生活をするために、アンダルスに出发するに際して、渡航の取り次ぎを求めて彼のもとからワナズマール・イブン・アリーフのもとへと向かった。その後、このこと（アンダルスへ渡ること）が実現した。うまくいかなかったあとで、願いが叶つたのである。私は「七」七十六年ラビーウ月／一三七四年八月一〇月にアンダルスに渡つた。スルターン「・イブン・アフマル」は私を接見したが、以前と変わらず、親切で気前よく厚く遇してくれた。

私は、「アンダルスへ到着した際に」ジブラルタルでスルターン・イブン・アフマルの書記に出会つていた。彼はイブン・ハティープの後任者で、法学者のアブー・アブドゥッラー・イブン・ザムラク<sup>⑩</sup>といい、<sup>⑪</sup>「スルターン・アブー・アッバース即位の」祝辞を述べるためにフェズへ赴く途上、セウタへ向けて船団で渡るところであつた。そこで私は妻子のグラ

ナダへの渡航を彼に委ねた。イブン・ザムラクがフェズに着き、王朝の人々に私の家族の渡航について話したところ、彼らは態度を冷たくした。というのも、私がアンダルスで落ち着いたために彼らは気分を悪くしていたのである。つまり彼らは、私がアミール・アブドゥッラフマーンと親交があると思つていたので、彼の味方となるように、私がスルターン・イブン・アフマルに仕むけていると疑つたのである。そこで、彼らは、私の家族に対して私に合流することを禁じ、スルターン・イブン・アフマルには私を自分たちのところに送り返すよう要求する手紙を送つた。しかし彼はこのことを拒否したので、人々は、私をトレムセンの岸に渡らせるように求めた。

マスウード・イブン・マーサーイは、かつて彼ら（マリーン朝の人々）から許可を得てアンダルスへ渡つた。彼らは、そこでスルターン「・イブン・アフマル」に次のことを直接話しよう彼にしむけたのであつた。すなわち彼らはスルターンに、私がイブン・ハティープの救出に動いていたことを明らかにしようとしたのである。彼らは新フェズを征服して手に入れるとすぐにイブン・ハティープを捕えていた。イブン・ハティープは牢獄から私に助けととりなしを求める手紙をよこしたので、私は彼の事について王朝の人々に書簡を出した。私はなかでもワナズマールとイブン・マーサーイに頼つたが、この努力はうまくいかず、イブン・ハティープは牢獄で殺されたのであつた<sup>⑫</sup>。さて、イブン・マーサーイがスルターン・イブン・アフマルのところによつてきて——人々が彼をせきたてていたのだが——イブン・ハティープの救出の件で私がしたことを報告した。スルターン・イブン・アフマルはこのために裏切られた気持ちになり、「トレムセンの」岸へ私を渡航させるという人々の要望に応じた。

私はフナインで船から降りた。私と「ザイヤーン朝」スルターン・アブー・ハンムーとの間の空気は暗いものであつたが、これは前述のように、かつてザープでアラブ遊牧民が彼を攻撃したときに私がしたことによるものであつた<sup>⑬</sup>。スルターンは私にフナインに留まるよう命じた。その後、ムハンマド・イブン・アリーフ<sup>⑭</sup>がスルターンのところへやつてきて、私の処遇に関して彼を咎めた。そこでスルターンは使者を送つて私をトレムセンに呼び寄せた。私がトレムセンのウッバードに落ち着くと、私の妻子がフェズから合流し、ともに住んだ。それは、「七」七十六年断食明けの祭／一三七五年三月五日のことであつた。そして私は学問を教え始めた。

この間、スルターン・アブー・ハンムーにはダーウード族についてのある



考えが浮かび、彼らと親交を結ぶ必要性を感じた。そこでスルターンは、私を呼び、このための彼らへの使節を私に任じた。//p.228//私はスルターンに不信任を持ち、引退と隠遁の道を選ぼうと思ったので、心の中では断りたかったが、表向きは承諾した。私はトレムセンから出発して、バトハーまでやって来た。そこで右方向に道はずれてマングース<sup>44</sup>へ着いた。私はグズール山の南側の方向にいるアリーフ家の諸族に身を寄せた。彼らは私を親切と気前よさで受け入れた。私は彼らのところに数日間留まった。彼らはトレムセンから私の妻子を呼び寄せてくれ、スルターンへの奉仕が実行できないことについて私にかわってスルターンにうまく言い訳をしてくれた。そしてトゥージン族の土地にあるカルア・イブン・サラマ<sup>45</sup>に家族とともに私を住まわせてくれたのであった。そこはスルターンがイクターとして彼らに与えたところである。//p.229//

私は雑事すべてから解放されて、そこで四年間過ごした。私が本書の執筆に入ったのは、ここにいたときである。私は、隠遁生活の中で私が導かれていったあの特異な様式にのっとった本書の『序説』を書き終えた<sup>46</sup>。その隠遁生活では言葉と観念の奔流が思考の上に流れ込み、ついには奔流の中の精髓が攪拌され凝固して、その結果が著作となったのである。後述するように、チュニスに戻るのはこのあとであった。

//p.230//

## チュニスのスルターン・アブー・アッバースのもとへの帰順と滞在

### 【チュニスへの帰還】

さて私はアリーフ家の諸族のもとカルア・イブン・サラマに到着し、そこでアブー・バクル・イブン・アリーフ<sup>47</sup>が築いた館に住んだ。それは最も住民が多く堅固な館のひとつである。その後、私はかの地で長く暮らした。私はマグリブの王朝（マリーン朝）からもトレムセンの王朝（ザイヤーン朝）からも心が離れてしまい本書の執筆に没頭していた。『序説』を書き終え、アラブとベルベルとザナータの諸情報に「着手していた」が<sup>48</sup>、自分の記憶から大方を口述し、推敲や手直しをしようと望んだときに、私は大きな町にしかない書物や資料類<sup>49</sup>をぜひ読みたくなった。それから私は病を患った。神のご厚意がなければまさに死の淵に立ったかという病である<sup>50</sup>。そう

したことがあり、戻って「ハフス朝」スルターン・アブー・アッバース<sup>51</sup>のもとに行きたい、チュニスに旅立ちたいという気持ちに私が私にわき起こった。私の父祖たちの落ち着き先、住まいがあり、彼らの遺したもののや墓のあるところである。私は急いでスルターンに、彼に服従し、帰還したいと書簡をしたため、待った。するとまもなくスルターンの書簡といくつもの約束が来たのである。彼は、私に安全を保障し、来訪を急かしてくれた。そこで私は急いで旅立ち、リヤーフ族のアラブ遊牧民アフダル族<sup>52</sup>とともにアリーフ家のもとを発った。彼らはマングースに糧食を求める途上、そこ（カルア・イブン・サラマ）にいたのである。我々は「七」八〇年ラジャブ月／一三七八年一〇―十一月に出発して、ザーフの周縁地であるダウサンにむけて砂漠の道をとった。それから私は、ヤアクーブ・イブン・アリー<sup>53</sup>に従う者たちを、彼がザーフに興した私領地ファルフアル<sup>54</sup>で見つけ、ともに丘陵地帯へ登った。私は彼らと一緒に進んでもらい、ついに//p.231//コンスタンティヌの郊外にて彼（ヤアクーブ・イブン・アリー）のもとに到着した。

ヤアクーブ・イブン・アリーと一緒に、「コンスタンティヌ」支配者でスルターン・アブー・アッバースの息子であるアミール・イブラーヒム<sup>55</sup>が自軍を率いて宿营地にいた。私が彼（イブラーヒム）のもとに参上したところ、彼は親切に気前よく望外のものを分け与えてくれた。さらに彼は私がコンスタンティヌに入ること、私が彼の父の御前（チュニス）に赴く間、私の家族が厚遇を保障されたうえで「コンスタンティヌ」に滞在することを許してくれた。またヤアクーブ・イブン・アリーは、私とともに自分の兄弟アブー・ディーナールの息子<sup>56</sup>を一族の者たちもつけて遣わした。そして我々はスルターン・アブー・アッバースのもとに向かった。当時、彼はチュニスを出て軍を率いジャリド地方<sup>57</sup>をめざしていた。その地方のシャイフたちを、彼らがすわる内乱の座から引きずり下ろすためである。

そういったわけで私はスーサ郊外にて彼のもとに到着した。すると彼は私の来訪に対して挨拶をおくり、私の到着をねぎらい、最大限の親しみを見せ、要事について私の助言を求めた。それから私をチュニスに帰し、チュニスでの自らの代理である子飼いの家来のファアリフ<sup>58</sup>に、家を用意し、十分に俸給と「馬のための」飼葉を与え、大いに厚遇するよう指示した。そこで私はその年のシャアバーン月／一三七八年一―一二月にチュニスに戻ってスルターンの心遣いと保護のおかげをこうむることになった。私は人を

遣つて妻子を呼び寄せ、かの恩恵の牧場において再び家族は一つになった。そして私は旅の杖を投げたのである。

スルターンは長らくチュニスを不在にした後、ついにジャリードの諸都市を征服した。ジャリードの敗残者は散り散りになり、指導者のヤフヤー・イブン・ヤムルール<sup>⑤</sup>はビスクラにたどり着いて姻戚のイブン・ムズニーのもとに留まつた。一方、スルターンは「p233」ジャリード地方を自分の息子に分け与えた。彼は息子のムハンマド・ムンタシル<sup>⑥</sup>をトゥーザル<sup>⑦</sup>に据え、ナフタ<sup>⑧</sup>とナフザーワ<sup>⑨</sup>を彼の所領とした。また息子アブー・バクル<sup>⑩</sup>はガフサ<sup>⑪</sup>に据えた。スルターンは諸事平定してチュニスに凱旋した。

彼は私に関心を示し、私を近づけてともに座し、誰もいないところで打ち明け話もするようになった。そうしたことで近臣たちは不快をおぼえ息が詰まる思いを味わつた。彼らはスルターンのもとでとめどなく「私への」中傷話を吹き込んだが、成果はなかった。彼らは金曜モスクの導師でファトワーのシャイフ<sup>⑫</sup>であるムハンマド・イブン・アラファ<sup>⑬</sup>のところに足繁く通つていた。私と彼とは、ともに師たちの講義を受けて育つたのだが、そのとき以来、彼の心には「私に対する」嫉妬の黒い点があつた。彼は私より年長であつたが、たいていは私のほうが明らかに優れていたので、彼の心のそうした黒い点はどす黒くなるばかりで、ついに消えなかった。「p233」私がチュニスを足を踏み入れたとき、彼の弟子を含め知識を求める者たちが私のところに群れ集まり、自分たちに教える労を取つてほしいと求めたので私はそれに応じた。それも彼には一大事であつた。彼はそういう多くの人たちに私を避けるよう囁いたけれど、受けいれられなかつたので、激しく嫉妬するようになつた。ちょうどそれと同じ頃に近臣たちが彼のもとに集まつたのである。彼らは私に敵対するよう「スルターンを」けしかけ、私を中傷しようということで見向きの一致を見た。しかしスルターンはそうしたこと（私への中傷）がなされてもずっと彼らに見向きもしなかつた。

#### 【『省察すべき実例の書』の完成とアブー・アッバースへの献呈】

スルターンは私に本書の執筆に専念するよう命じていた。諸知識や諸情報、そしてその効用を得ることを楽しみにしてのことである。そうして私は本書のうちのベルベルとザナータの諸情報を作成させた。さらに私はかの二つの王朝<sup>⑭</sup>とイスラーム以前のこと、そのうちで私のもとに届いている諸情報を書いた。また私はスルターンの書庫に献上する本書の写しも仕上げた。

さて、彼ら（近臣たち）がスルターンに言い立てていたことに、私がスルターンへの頌詩を詠むのを控えていることがあつた。単に私は詩作に見向きせず、学問一筋に打ち込んでいただけなのだが、彼らはこのように言つていた。「彼は陛下の權威を軽く見ているからこそ、それ（頌詩を詠むこと）をしないのです。陛下の前に仕えた王たちには頌詩を多く詠んでいるのですから」私はそうしたことを彼らの内輪にいた信賴のおける筋からかぎつけた。そこで私はスルターンに、その名を冠して本書を献上したとき、その当日に、このカスィーダ詩を詠みあげた。彼を称えその言行や戦勝に言及するとともに、私が詩作をしなかつたことを弁明し、本書の献呈をもってご厚情を求めたのである。以下がその詩である。

あなたの御門のほかに異邦の者が望みとするものがあるか  
あなたの脇をはなれて世の人の願ひに行き先などあるか

その願ひこそは隔てを超えあなたのもとへと私の決意を遣わせた熱意

研ぎ師が剣を研ぐような「私の」鋭き決意を

あなたはこの世での落ち着き先、望みのたどり着く場

かがやく雲から降り注ぐ慈雨「p234」

光輝ある城砦がそびえるところ

きらめく星々はそこに心惹かれ集まる

白き天幕のあるところ

高みと寛容さを目にしようとそのゆるやかな帳は巻き上げられる

力強い保護のあるところ

その中庭に丈夫な槍は陰をさしかけてくれる

貴人たちのいるところ

その住まいでは乳香と沈香の香りでもてなしの火<sup>⑮</sup>を焚く

槍の枝がまさに芽吹こうとするところ

「その枝は」くぐくぐと血を飲み干した

戦の男たちが長く激しく戦つたところ

駿馬たちすら疲労困憊するほどに

美しい顔が恥じらいに赤く染まつたところ

両頬が喜びに輝いて

狩人たる王たちと軍隊のいるところ

彼らあつてこそ隣人も客人も心強い



「ハフス朝は」<sup>70</sup> マフディーの一族に、いや神の唯一性の一族に属す<sup>71</sup> クルアーンは「人類に」それ（神の唯一性）を教え説き明かした  
いや、属するのは慈愛あまねきお方の一族<sup>72</sup>、

神は彼らが人々を愛するようお定めになった

そうして彼らは高みに昇りより好ましきものとなった

彼らは神を畏れる心を礎に自らの栄光の家を建てた

そうして彼らが堅固に建てたものなんともすばらし<sup>73</sup> //p.235//

彼らはアブー・ハフス<sup>74</sup>を父祖にもつ一族

知らざるや、かの真偽を分か<sup>75</sup>つ者が最初の祖先

真つずぐな槍の柄の節目<sup>76</sup>のごとき連綿たる系譜

その槍をしつらえたのは熟練の職人

時代の頂よりも高きお方

栄光まばゆく、あまたの満月をちりばめた冠であるような

彼らは今も昔も人類の中で抜きんできていた

なかでもあなたは最も力強く抜きんでたお方

彼らは星々より高く堅固な建物を築いたが

あなたの高き建物はさらに堅固で永久にそびえる

逆巻く波濤のごとく闇深き夜に

砂漠の海へ飛び込む者に向かつて

槍先に明かりを灯して

夜闇の砂漠を怯まず進む者に向かつて

まるで寝台の縁に現れる幻影のように

ラクダの鞍におおむけに寝る者に向かつて

彼ら、富に至る道から成功を求める者、

常に豊かな実りに至る道を探す者に向かつて、私は言ってきた

ラクダを休ませよ、すでにお前は与えて下さるお方を得た

恵み深き贈物を惜しみなく与えるお方だ、と

なんと気前よく与えるお方であろうか

雨露の恵みが庭園に命を与えるかのように //p.236//

このお方こそ信徒たちの長<sup>77</sup>、我らがイマーム

信仰においても現世においてもこのお方こそ頼みの綱

このお方こそアブー・アッバース、最良のカリフ

誰もが知る美質がその証し

敵に勝つために神の援助を求める者

主の支援に我が身を委ねる者

あなたは悠然として諸王に先駆け、高みに至った

あなたの悠然たる先駆けぶりはなんと見事なものであろうか

実にあなたは全ての支配者の中で最も高く完全なる者

彼らが高みを目指して朝駆けしても「追いつかぬ」

あなたがたの祖先を彼らの祖先と比べてみよ

誰もが知るようにことは明らかである

彼らはあなたがたの一族にひたむきに服従した

それこそ「断ち切られることのない」信仰の絆である

そのことについてはトテムセンやザナータ族やマリーン族に尋ねよ

昔の彼らは伝えられるとおりである

アンダルスについてはその町々に問え

町々は絶望し脅かされていたときのことをあなたに教えるだろう

同じようにマラケシュやその城々に問え

その跡は問う者に答えてくれるかもしれない<sup>78</sup>

おお、王よ、あなたを描写しようと人々がいくら心を働かせようと

筆舌に尽くしがたきお方よ

あなたはなんと神に援けられているお方か

あなたの命は使徒を通して下された神の命のごとく必ず実行される

あなたが到来したのはとても困難な時代であった

時代はとても厳めしくひきつった顔を見せていた

当時の人々の結束は破れ果て

カリフ位の威信が失われ蔑ろにされていた

人々はあなたに心を向け

あなたに状況を正してほしいと願望んだ

ゆえに権力を得るや否やあなたは急いで事に臨んだ

躊躇なき力と決意をもって

あなたは手に負えぬ強情ものを屈服させ

到底ならせそうになかった岩地をならした //p.237//

あなたは獐猛な輩の悪を和らげ

禁を犯しやりたい放題だった彼らを追い払った  
サウラとその一族には力があり

その力をもってズアイブは敵対し、マアキルは攻めていたものだ

ムハルヒルは未だ不得手なのに布を織ろうとしていたが

やはりそれはほころびていた

ここでのサウラの意図するところは、アブー・ライル家のアミールである  
サウラ・イブン・ハリッド・イブン・ハムザのことである。ズアイブは  
彼（サウラ）の父方のおじ、アフマド・イブン・ハムザの息子である。  
そしてマアキルは彼らと同盟関係にあるアラブ遊牧民の集団である。ム  
ハルヒルはアブー・ライル家の同類であり宿敵であるムハルヒル・イブン・  
カースイム一族である。

それではアラブ遊牧民と彼らの部族の叙述に戻ろう。

人類は彼らのことに驚嘆した

彼らは、従順なラクダをともなつて遠くへ向かう砂漠の民

彼らは柱の上に天幕を張った

そこには長い盾としなやかな槍が置かれている

焼石の転がる乾いた大地の上においても

「砂漠の」深淵に落ち喉の渴きをうるおすことが出来る

彼らは蜃気楼を飲みものとし

勇者の槍と剣を糧とするジン

剥き出しの地に宿る部族

彼らの前には、離れようが近づこうが、遠くまで広がる砂漠

彼らは砂漠の民として諸王を恐れさせてきたが

今や恩恵を与えられ安逸な生活を送るまでになった

あなたは砂漠へとゆるやかに入った

平穏に目を向けることも城砦の蔭に憩うこともなく

あるときは日中の酷暑があなたに熱風を吹きつけ

またあるときははためく旗が影をなす

戦いの日、あなたは痩せ馬たちに血の杯を与え

馬がいなければまた二杯目を飲ませる

栄光に包まれても質素を守り粉骨碎身

それでこそ馬も美しく輝く

いかなる隊商も夜旅をせず、いかなる軍勢も降りたたぬ

砂漠のはらわたをあなたは裂く

あなたは砂漠の上を軍団の裾を引いていく

長槍を持つ兵士を率いて威風堂々誇らしげに歩く

無防備な敵が矢を取り出しつがえるとき

あなたは彼らに完全武装の者たちを射かける

よくしなる槍を持つ兵たちと

白刃ひっさげた兵たちを射かける

ついにかの群れはばらばらになった

吹きすさぶ戦いの風にゆすぶられて

それからあなたは恩恵を与えて彼らをひきつけた

それ以来彼らはあなたの力に従い身を低くした

彼らが小なり小なり犯し続けてきた過ちを

あなたはジャリッドの民から取り除いた

あなたは彼らが建てた過ちの建物を破壊し

彼らを繋げていた過ちの綱を断ち切った

あなたはジャリッドの諸都市や境域を

勝利の珠を挟みつつ一繋ぎにして王権の首飾りとした

あなたは偽善の昇り口に封をした

あなたの刃は狙いを外さず、決意はしほむことがない

皆が恐れる轡と手綱さばきによつて

ユーフラテスの甘き清水が流れるようにあなたは進む

コロシント瓜のように苦かった時は終わり

時代は甘くなり美味となった

そこで人類は最もすばらしき支配者、情け深きお方の力に頼った

栄光あり卓越するお方に

あなたについて心という心は満ち足りた

子どもも大人もどちらも同じく

おお、支配者よ、あなたは時代と民とを広く包み込み

望んでいた以上の大きな平穏と安全をもたらした

大地には幽鬼の恐れがなく

その面を仔連れのライオンがうろつくこともない

旅人たちはどんな不毛の地をも旅することが出来る

鷹の脅威のない砂鷄の群れのように

讃えあれ、神はあなたの高みにより希望をよみがえらせ

一度外された首飾りをお戻しくださった

讃えあれ、神はあなたのお導きにより道の目的を人間に明らかにし、

思慮のある者の視界がひらけ見えるようにしてくださった

するとこの世はベールをとった花嫁のよう

美々しき装いで誇らしげに裾を引いて歩く

国はあなたの公正さにより広々としたさまをとり戻したよう

道に迷う恐れはない

星々の光は幾倍も輝きを増したよう

それはこの上なく美しいあなたの額の白星の光のおかげ

そして目の前で帳があげられ

思い描いてきたものの真の姿を見ることが出来たよう

また、この詩の中でスルターンへの頌詩を詠まなかった言い訳を述べた部分  
分は以下の通りである。

陛下、私は考えもまとまらず何もわからず

全てが混沌としている

真実に達することを熱望しているのに

それに達することが出来ぬまま引き離される

夜通し着想のひらめきを汲みだそうとするのに

それはこぼれて深淵に戻っていく

我が魂は言葉と格闘しつつ夜を過ごす

詩行は散り散りとなり脚韻は遁走する

一年かけて私は言葉を選んだが

一年もかけた詩が<sup>82</sup>批判され蔑ろにされる訳にはいかない

だから私はそれを詩を愛する人びとから隠しておく

私の詩のあるところで彼らが集まって宴を開かないように<sup>83</sup> //p.240//

それは商品なのだから、受け入れられてこそ良い商いができる

名のある詩人の詩も招かれざる客の詩もどちらも同じ

私の思考の娘たち（詩）がくたびれて化粧もせず

くだらない話をしながらあなたのもとに來たとしても  
あなたが欲待してくだされば、彼女たちも誇りを持てる  
そのときこそ私は雄弁かつ明瞭に話すだろう

その詩の中の、スルターンの書庫のために著した本について述べた部分は  
以下の通りである。

時代とその人々の営為の実例<sup>84</sup>をお受けください

公正なる人はその美德に従うことになる

過ぎ去った者たちの話を解き明かし

彼らのことを総括したり詳述したりする紙葉をお受けください

トゥッバウたち<sup>85</sup>やアマレク人<sup>86</sup>は秘話を明かし

彼ら以前のサムード族<sup>87</sup>や太古のアード族<sup>88</sup>も

イスラームの信仰に集ったムダル族<sup>89</sup>も

彼らに従ったベルベルも「明かしてくれる」

私はそれ（実例）を集めるため昔の人々の書物を要約し

そして彼らが見過ごしてきたことを最初にもつてきた<sup>90</sup>

さらに私は無骨な言葉を柔らかにした

さまよい歩く言葉を私の声に従従させるかのように

私はあなたの高みに本書という隠れた宝石と

沈むことのない星々を捧げた

そして本書をあなたの王権の書庫の誇りとした

神かけて私は自分の言においてひとつも誇張はしなかった

誇張は美しくない

招かれざる客が偽りを言おうと「あなたには通じない」

あなたは諸々の知識にすっかり通じておいでになる<sup>91</sup> //p.241//

あらゆる美德と真実の基礎はあなたの両手の中にあり

もし誰かがとりかえてもその本来の場をあなたはご存知である

あなたのもとでは常に真理が何よりも前に出るのに

嘘つきどもが何を言い立てられるだろうか

神はあなたにこの上ないものを賜った

ゆえにご満足のいくようお治めください、あなたは最も公正なお方



あなたの主がその僕たちに、  
彼らの主たるあなたのご長寿を賜りますように  
あなたがよく面倒を見なさいと神は彼らをお造りになったのだから

【病から回復したアブー・アッバースに献じた詩】

ところで私が、スーサ郊外の彼（アブー・アッバース）の軍営からチュニスへと発ち、その後チュニスに滞在していたとき、進軍中の彼が病に襲われたもののまもなく回復したとの報せが届いたことがあった。その際、私は彼にこのカスィード詩を送った。

しかめ面をしていた時代の顔は今や大笑いし  
苦しみに包まれていた我らを慈悲が包みこんだ  
ほやけていた吉報の白星は今や鮮やか  
それを知らせたのは白ラクダを先導する者たち  
彼らは吉報で懊悩の夜を切り裂いた

あたかも熾<sup>おこ</sup>った燃え木で闇を切り裂いたかのよう  
あたかも彼らは人類に生命を吹き込んだかのよう  
その生命によって希望は墓場からよみがえった  
その吉報に人びとは歓喜した

慶事という最良の衣服を与えられて  
まるで葡萄酒が彼らと飲み明かしたかのよう  
杯も使わずその幸いを飲みほした  
喜びと満足で体を揺らしながら  
太陽とともに新月に向き合いながら  
馬上で挨拶しあう人がいる

仲良く席をともしして仲間に通される人がいる  
そして人びとの親しく集まる場で  
彼ゆえに正しきお導きの跡が認められる、神への仲介者がいる

//p242//

  
彼は吉報の内に聖なる慈悲を見て  
慈愛あまねきお方のもとに立ち返る  
一心に祈願するという治療こそ  
難病をも治し癒してくれる

ここでの「彼」とは、最も偉大なる金曜モスク、チュニスのザイトゥー・ナ・モスクの導師である<sup>90</sup>。

カリフたちの子よ、ひとたび消えた真理の道は  
カリフたちの光によって再びたどられるようになった

「かのお方は」まっすぐな信仰の援け手であり  
いったん決意すれば翻すことはまずない  
かのお方は決意を固めただ安楽を願うことから離れた  
暁闇と早朝の礼拝の喜びの中へと、安楽を願う喜びから離れた  
かのお方は臣民を施政によって守った

故に臣民は最も寛大なる支配者、指導者であるお方のもとに集った  
「かのお方は」仔獅子たちの棲みかを守る獅子であり  
仔獅子たちは何者をも寄せつけぬ棲み処として彼を頼った  
私は誓う<sup>91</sup>、色とりどりに刺繍された谷間にかけて  
花嫁衣装をまとい誇らしげにふるまいだした「谷間にかけて」

私は誓う、かがみこむ姿で現れる女たち、アーチ橋<sup>92</sup>にかけて  
彼女らはタスムやジャデイスの残党<sup>93</sup>から「の伝承」を報せる  
「彼女らは」灰色く腹はやせ衰えて

あたかも不毛の荒野に囚われた隊商の擦り切れた衣服のよう

//p243//

  
その着古しはラクダの背も瘤もすっぽりと覆っていたが  
けれども彼女らは気高く横目でにらんでいた

「私は誓う」あなたが長生きして下されば人類は万全に守られ  
我らの心、魂も生きることができると

あなたこそは我らの信仰を保護すると請け合ってくださいるお方である  
あなたがいないければその約束は失われ蔑ろにされていたであろうと  
神はあなたにこの上ないものをお与えになった  
あなたに完璧なる幸運をお与えになった

我らが顔を向けるより先にはあなたはあなたに従う  
頭となる者も従属する者もどちらも同じく  
あなた自身が動かずともあなたの威厳は出征して  
敵どもを燃え盛る炎のごとく圧倒する  
あなたが出征するときは

供まわりと軍勢を率い、あなたが導く徴は幸いを示す

もろもろの証がすべて完全に合致するときは

耳に聞こえ測ることのできる形で現れる

そのようなあなたの王権をご享受ください

それは敵どもを烈しい罰で苦しめる、アード<sup>84</sup>の昔から続く王朝

このカスィード詩をお受けください<sup>85</sup>

あまたの寶石で飾った乙女のように恥じらう私から

お許しください、輝く若さはすでに「私から」消え去った

今や光を投げかけるのは私曉のごとき白髪<sup>86</sup>の輝きのみ

もし私を身近にお寄せくださったあなたのご配慮がなかったなら

私はもはやペンをとることもなかっただろう

神かけて、僻遠の地の経験は私に

黒ずんだぼろぼろの縄しか残さなかった<sup>87</sup> <sup>||p.244||</sup>

当代「の人びと」は私を責めたてた<sup>88</sup>

集いと字びを重ねて私が修めた文芸<sup>89</sup>について

「彼らは」私の富に襲いかかり私の安全な場をおびやかした

そして私という継木を活発さという巨木から引き抜いた

だがあなたのご満足こそが私へのお慈悲となり

魂の望みをよみがえらせ苦しみを消し去ってくれと私は期待する

#### 【チュニスからの出立】

それから近臣たちはありとあらゆる種類の中傷ぶりで盛んに「私を」中傷した<sup>90</sup>。イブン・アラファは自分のところに近臣たちが集まってくるときに焚きつけたので、ついに彼らはスルターンに私を遠征に同行してほしいとせきたてた。彼らはチュニスにおける「スルターンの」代理であり將軍である、スルターンの子飼いの家来のファーフにも、私がともに滞在することについて用心するよう吹き込んだ。彼自身がそう主張したのだが、私が彼の権力を脅かすというのである。彼らの意見はイブン・アラファがそのことをスルターンに証言するということで一致した。それでイブン・アラファは私がいけないときにスルターンに証言をしたが、スルターンは耳を貸さなかった。

その後、スルターンは私に使いを出して遠征に同行するよう命じた。そこで私は命令にがっかりはしながらも急いで従った。私にはどうしようもな

かったのである。私は彼に同行して出発して、イフリーキヤの丘陵のまん中、テベッサに到着した。スルターンは自軍と盟友のアラブ遊牧民を率いトゥーザルへ下ろうとしていた。それはイブン・ヤムルールが「七」八三／一三八―一三九二年にスルターンの息子からトゥーザルを占領して支配を回復したからである<sup>91</sup>。スルターンは進軍して彼を追い出し、息子と側近たちをそこに戻した。テベッサを発ったとき彼は私をチュニスに帰したので、私は自分の私有地であるチュニス近郊のラーヒーニンに滞在して、収穫物を集めた。やがてスルターンが大勝して凱旋し、私は同行してチュニスに戻った。

「七」八四年シャアバーン月／一三八二年一〇月になったとき、スルターンはザーフへの進軍を決定した。<sup>||p.245||</sup>ザーフの支配者のイブン・ムズニーが、イブン・ヤムルールを匿い、隣人への保護を与えて彼のために諸事整えたからである。そこで私は、前の遠征のときと同じことが自分に再び起こるのを恐れた。

港にアレクサンドリアの商人たちの船が一隻あった。すでに商人たちは物品や商品を積み込んでおり、アレクサンドリアにまさに出航しようとしていた。

私はスルターンに「巡礼の」義務を果たすべく私の道を開いてくれるよう懇願した。彼は私にそれを許可したので、私は港へと向かった。王朝や町の名士たち、知識を求める学徒たちも、私のすぐあとから一体どうしたのかと口ぐちに尋ねていた。私は彼らに別れを告げ同年のシャアバーン月半ばに出帆した。

そして私は居を移し彼らから離れた。神——讃えあれ——のよきお計らいがあったおかげである。私は、かつて行っていた学問の業績をあらためて積み重ねるべく、解放されたのである。神こそは諸事を司るお方、讃えあれ。<sup>||p.246||</sup>

#### マシュリクへの旅、そしてエジプトでのカーデー職就任

私は、「七」八四年シャアバーン月半ば／一三八二年一月一日にチュニスより出立し、四〇日あまり、海上にいた。その後、断食明けの祭の日／一二月一六日、すなわちザーフ王（マムルーク朝スルターン・バルクーク）<sup>92</sup>が、玉座に就き、王権の一族であるカラウーン家<sup>93</sup>を排除して王権の座に坐ってから一〇日が過ぎた日に、アレクサンドリアの港に到着した。

ところで我々は、彼の即位を予期していた。何故なら、彼がそのことを強く望み、そのための地ならしをしていたことが遠国にあっても常々伝えられていたからである。そして私は巡礼の支度を整えるために一か月間、アレクサンドリアに滞在した。しかし、その年、巡礼することはかなわなかった<sup>100</sup>。

そこで私はズー・アル・カアダ月一日／一三八三年一月一日にカイロへ移った。私は現世の都を、世界の庭園を、諸民族の集まる所を、人々が蟻の如く群れ集まる場所を、イスラームのイーワーンを、王権の座を目の当たりにした。そこでは、数々の宮殿とイーワーンが空に輝き、数々の修道場<sup>ハシカ</sup>とマドラサが地平線にて光を放ち、満月や星々の如きウラマーが煌めいていた。そこは、天国の川<sup>101</sup>にして天の水の流れる道であるナイル川の岸辺にあって、その豊かな流れは人々に一杯、二杯と水を飲ませ、<sup>102</sup>「<sup>103</sup>実りと恵みをもたらしていた。私は、道行く人々の雑踏で息の詰まりそうな町の小路を進んだ。その町の市場は神の恩寵に満ち満ちていた。

この町について、その文明の度合いの高さについて、そしてその発展ぶりについては、まだまだ話すことがある。これまでに出会った我が師匠たちや友人たち——彼らは巡礼や商用で来ていたのであるが——がこの町について語るところは実に多様であった。我らが友にしてフェズの大カーディーであり、マグリブにおけるウラマーの偉大なる者であったアブー・アブドゥッラー・マッカリー<sup>104</sup>——彼の巡礼<sup>105</sup>からの帰還は「七」四〇／一三四〇年のことであった——に、「カイロとはどのような町か」と問うたところ、彼は「カイロを見ない者はイスラームの栄光を知らない者だ」と言った。

また我らが師匠にしてビジャーヤのウラマーの偉大なる者であるアブー・アッバース・イブン・イドリース<sup>106</sup>に同じことを問うてみた。すると彼は「まるでその町の人々は「最後の審判における」勘定を終えて出てきたかのようであった」と言った。つまり、その民族の多様さと彼らの来世における安寧を示唆しているのである。<sup>107</sup>」

また我らが友にしてフェズの軍隊付カーディー、法学者、書記であるアブー・カースィム・バルジー<sup>108</sup>はスルターン・アブー・イナーンのマジュリスに出席したことがあった。それは、「七」五六／一三五五―六六年に、彼がスルターンの使節としてエジプトの王<sup>109</sup>のもとへ行き、また、スルターンから預言者ムハンマドへ宛てた手紙<sup>110</sup>をその高貴なる墓所へと届けてから帰着した際のことであった。スルターンがバルジーに、カイロについて尋ねたところ、彼は「カイロについて簡潔に述べることにしましょう。人の想

像というものは実際に知覚されるものを越えて広がるため、現に目で見たものは見劣りしてしまうものですが、カイロはそうではありません。何故なら、カイロは人の想像を越えて広がっているからです」と言った。そこでスルターンと居合わせた者たちは、その言葉に感嘆したのである。

私はカイロに入り、数日滞在したところ、提供できるものなど僅かしかないというのに、教えを求めて、カイロ在住の知識を求める者たちが私のもとへ群れ集まってきた。私に言い訳の余地を与えてくれなかった。そこで、私は講義をするため、当地のアズハル・モスク<sup>111</sup>に坐ったのである。<sup>112</sup>」

その後、スルターンへのつてができた。スルターンは親切にも私と面会してくださり、異国の地にある心を慰め、喜捨<sup>113</sup>として豊富な俸給を与えてくださった。それが、知識人とともにいるスルターンの常の姿であった。一方、私はわが妻と子供がチュニスから到着するのを待っていた。しかし、かの地のスルターン（ハフス朝君主アブー・アッバース）が、彼のもとへ私が帰還することを心待ちにするあまり、我が妻子の旅立ちを妨げていた。そこで私はエジプトの支配者たるスルターンに、我が家族を出立させることについて仲立ちを求めた。すると彼はその件について、チュニスのスルターンに手紙を出してくれたのである。その文面は以下の通りである。<sup>114</sup>。

慈悲深く慈愛あまねき神の御名において

神の僕にして神の友、あなたの兄弟<sup>115</sup>、バルクーク<sup>116</sup>

最も偉大なるスルターン、王者たるザーヒル王、最も栄光ある主人、知者、公正なる者、神の支援を受けし者、ジハードを行う者、皆に拠って戦う者、国境で戦う者、勝利を与えられし者、諸王の王<sup>117</sup>、現世と来世の剣、イスラームとムスリムのスルターン、全世界において公正さに命を吹き込む者、抑圧する者たちに対抗して抑圧された者たちを公正に扱う者、王権の継承者、アラブ人とペルシア人とトルコ人のスルターン、当代のアレクサンドロス<sup>118</sup>、厚遇を与える者、玉座と王座と<sup>119</sup>の王冠の所有者たちに王権を与える者、諸地域と諸地方に惜しみなく与える者、暴君や圧制者や不信仰者を根こそぎにする者、二つの海の王<sup>120</sup>、二つのキブラ（メッカとエルサレム）への道を通ずる者、高貴なる両聖都（メッカとメディナ）の守護者<sup>121</sup>、大地に広がる神の影、神のシンナとその義務を司る者、地上のスルターン、広大なる大地の保護者、諸々の王とスルターンの主人、信徒たちの長と分かち合う者<sup>122</sup>、殉教者にして現世と来世における名誉であるア



ブー・マアリー・アナス<sup>18</sup>の息子アブー・サイード・バルクーク——神よ、彼の権力を永続せしめ、彼の軍隊と彼の臣下たちを助け給え——より。

崇高で、高位にあり、勝利を与えられ、幸運にして、神に助けられ、よく護られし御前<sup>19</sup>、スルターンにして、知者、公正なる者、神の支援を受けし者、ジハードを行う者、比類なき者、アブー・アッバースの御前に宛てて。あなたは、イスラームとムスリムの宝、現世と来世の頼みの綱、ムワッヒドたちの模範<sup>20</sup>、ガーズイーたち<sup>21</sup>とジハードを行う者たちの援助者、神に感謝を捧げる者たちの剣<sup>22</sup>、諸王朝を正す者であります。その王国が彼の力により繁栄しつづけ、彼の威厳が圧制者たちの心を圧倒しつづける、彼の公正さが現世と来世において彼を栄光の間に宿らせつづけますように。その水場が澄み、その外套がゆつたりとしている挨拶を、その香りが広がり、その幸福が輝く賛辞を、その熱情がいや増し、その幸運がよりすばらしいものとなる愛を送ります。

神に讃えあれ。それは人々の心を「集められた軍隊」<sup>23</sup>とし、遠くあつても愛情の結びつきを確固たるものとなし、諸王間の交誼を日々新たにすお方。また我らが長にして我らが主人、神の僕にして神の使徒、ムハンマドに不朽不滅の祝福と平安がありますように。それは、神が一月行程離れた敵にさえ恐怖を与えることで援け支える者にして<sup>24</sup>、*[[p25]]*彼によって信仰のミナレットを高く打ち建てる者。またムハンマドの一族と彼の教友に不朽不滅の祝福と平安がありますように。彼らはムハンマドの道に従い服する者たち。

さて、我らは高貴なるあなたに対して、以下のことを明らかにお知らせしましょう。すなわち、聖なる知とその知の徒を重んじること、知というものを尊ぶこと、知の旗を広げること、知の徒と知に奉仕する人々を愛すること、彼らの意図するところを容易ならしめること、彼らの望みを実現すること、彼らを厚遇すること、そして以上のことによつて、陰になり日向になり神へ近づくこと、こうしたことを神——彼に讃えあれ——は高貴なる我々が生まれながらに有するものとされたのです。そして、ウラマーとは——神が彼らを嘉し給いますよう——預言者たちの遺産相続人であり、神の友たちの喜びであり、神の創り給ひし人間たちの地上における導き手であります。特に、このことについて知る力を神から与えられ、最良の道を通してそこへと達するように導かれた人物こそがウラマーであります。それは例えば、その者ゆえにこの書簡を我々がしたためる人物、すなわち、

いと高き座にある師匠、偉にして大、知識を備え、有徳で、生まれが良く、神の恩寵を受け、人の前に立ち、博学であり、人の範となり、神に導かれており、比類なく、真実を確かめ、由緒正しく、類例なく、栄光を有し、宗教の友<sup>25</sup>である者、イスラームとムスリムたちの美、全世界のウラマーの美、有徳者たちの内で類例なき者、雄弁なる者たちの範、ウンマにおける博学、イマームたちのイマーム、求める者たちに知を与える者、王たちとスルターンたちの忠実なる友、アブドゥッラフマーン・イブン・ハルドゥーン・マリーキー——神よ、彼に対し常しえに恩寵を与え給え——のことであります。実に彼は栄誉を与えるに最もふさわしく、*[[p25q]]*後援するに最も適し、その価値があり、位階において最も偉大な者であります。

彼は高貴なる我らが王国へ移り住み、エジプトの、我らがもとの滞在を選びました。それは彼が故国を嫌つてのことではなく、むしろ彼のよき本質と彼の美しき属性という価値ある宝石故に、我らに愛情を示し、我らの考えに近づこうとしてのことなのです。また我らは彼の内に、描写することも数え上げることもできない、人々の想像を越えるものを見出ししました。やあ、描写をしても国を訊ねてもなんと稀な人物であることか<sup>26</sup>。彼は、あなたたちのもとよりあらゆる稀なことを携えてやってきました。彼は、我らのもとへ至つて以来、いと高き御前（あなた）に対して最大限の感謝を表明し、その麗しき性質を賞賛し続け、とうとう我らの高貴な考えをあなたへの愛情へと傾かせました。そして我らはあなたに対して書簡をしたためることにしたのです。

時に耳は、目よりも早く恋に落ちるもの<sup>27</sup>

その一方で、彼は我々に対して、彼の妻と息子たちがチュニスの王国において、いと高き御前の保護のもとにある、と述べました。また彼は、家族を呼び寄せようとしたが、それは、彼が我々のもとに滞在する間、家族らとともに滞在し、暮らせるようにするためです。そこで我らの高貴なる見解は、この麗しき二つの理由故に、いと高き御前に対して書簡をしたためるべきと考えたのです。我らはいと高き御前にそのことを告げることとしました。が、それは、高貴なる御前がその寛大な考えとその愛情からなる意図に基づいて、前述のシャイフ・ワリーユッディーン（イブン・ハルドゥーン）の家族を召し出し、「チュニスを出立できない」彼ら自身の要因があればそれを

取り除き、彼らへの妨げがあればそれを排除し、助言し、彼らが榮譽を与えられ敬意を表されたものとして、彼（イブン・ハルドゥーン）のもとへ旅することを最良の仕方と準備せよ、といひ高き命令を発していただくためです。なおその旅は、敬虔で智に通じ、正しき道を辿る比類なき人物、すなわちこの書簡の持参者にしてイブン・ハルドゥーンの使者シャイフ・サアドゥッディーン・マスウード・ミクナースィー——神よ、彼に力を与え給え——の同行のもと、行われますように<sup>129</sup>。また彼らの旅支度はいと高き御前の所有する船の内の一隻によって行われますように。その際、前述の人々（イブン・ハルドゥーンの家族）を親切に遇し、彼らを世話することを確実に、そして常にも増してそうするよう、船乗りに指示してくださいように<sup>130</sup>。《p.253》もし指示を受けた船乗りが到着すれば、彼らには、彼らが思う以上の、彼らの希望をはるかに越える安全と厚遇が与えられることになりましょう。愛情に溢れ頼りがいのあるいつものあなたのように、上記の件についてご配慮くださいますように。またあなたが、使者の往来と書簡の遣り取りを贈り物としてくださいますように。もし至高なる神が望み給うならば、天使とクルアーンの章句によって、すなわち恩寵と幸運によってあなたをお守りくださるでしょう。

七八六年祝福されたサファル月一日／一三八四年四月一六日、高貴なる勅令に基づいて記す。神に讃えあれ。また我らが主人たるムハンマドと彼の一族と教友たちに神の祝福と平安があらんことを。

その後、サラーフッディーン・イブン・アイユーブのワクフ<sup>129</sup>の一つである、フスタートのカムヒーヤ・マドラサ<sup>130</sup>の一教授が亡くなった。そこで、スルターンは同マドラサで彼の代わりに教えるよう、私をその教授の座に据えた<sup>131</sup>。私がそのような状況にある間に、スルターンは、ありがちなこととして、マールイク派のカーディーに腹を立て、彼を解任した。ところで、そのカーディーは四法学派の第四の者<sup>132</sup>であった。その四人すべてが、代理職にある裁判官<sup>133</sup>と区別され、大カーディーと呼ばれていた。代理職の裁判官は、人の住んでいる場所が広く、人が多く、そしてカーディーのもとに上がってくる訴訟案件が多いゆえに任命されていた。《p.254》また四人の内の筆頭はシャーフィイー派のカーディーである。何故なら、その権限が「下エジプトの」東西の諸地方に、また上エジプトやファイユームに広く及んでおり<sup>134</sup>、さらに孤児の財産や遺言の監督権限<sup>135</sup>を独占していた為であ

る。なおその仕事は、以前はスルターンが直接行っていたが、今やそれはシャーフィイー派のカーディーに属するようになった、と言われることもある。

「七」 八六／一三八四年に件のマールイク派のカーディー<sup>136</sup>が解任された時、スルターンは私の地位故に、その職は私に相応しいとみなし、また私を高く評価して、この職を私に与えた。私はそのことをスルターンに辞退したが、スルターンはそれを許さず、彼のイーワーンにて私に名譽の衣<sup>137</sup>を授与した。そしてスルターンは側近の大物の一人を派遣し、私を、バイナルカスライン<sup>138</sup>にあるサーリヒーヤ・マドラサ<sup>139</sup>の裁きの座に就けた<sup>140</sup>。そこで私は<sup>141</sup>、自らに与えられた賞賛に値する職務を執行し、自らに委ねられた神の法に関して努力を払った。すなわち、私は、自らのカーディーとしての職務に對しいかなる非難も浴びぬよう、またいかなる地位も権力も私の職務を妨げるのではないようにした。そのために、裁きにおいて訴訟人双方を等しく扱い、《p.255》裁きを求める者のうち弱者の権利を護り、双方から執り成しや伝手を求められても断り、証言を確実に聞き取り、証言を行うために任命された公証人<sup>142</sup>の資格を吟味することに努めたのである。

彼ら公証人の中には品行方正な善人もいれば、不品行な悪人もいた。そして裁判官たち<sup>143</sup>は公証人への批判を避け、彼らの欠点を認識していながらそれへの対応を怠っていた。それは公証人たちが有力者たちにすり寄ることとその欠点を取り繕っていたからである。実に、彼らの大半はクルアーン教師として、または礼拝の導師としてアミールたちと交際し、公証人に相応しい者であるかのように装っているものであった。それ故、アミールたちは彼らを善良とみなし、その地位を用いて、公証人としての資格審査<sup>144</sup>の際にカーディーの前で口添えし、彼らのために便宜を図ってやるのである。こうして、彼らの弊害が深刻なものとなり、人々の間に彼らの捏造と虚偽による腐敗が広がった。私はそうした腐敗の一端を知り、厳罰を与え見せしめとした。また一部の公証人たちにはその資質がないことが明らかとなったので、私は彼らに証言を行うことを禁じた。ところで、公証人たちの中には、カーディーたちの事務局で働き、彼らの法廷にて文書作成を行う書記官たちがいた。彼らは訴えの口述筆記と判決の記録に慣れており、アミールたちが関わることになった各種の契約について、書式に則って巧みに文書を作成することができたので、彼らに重宝されていた。そうすることで、これらの公証人たちは同業者の中で優位に立ち、またアミールたちの權威を傘にきて、カー

ディーたちに対して誤魔化しができるようになるのである。彼らはそれによつて、予想される自分たちへの非難に備えるのであるが、彼らがその非難に晒されるのは彼らの諸々の行為故である。ときに、彼らの一部は瑕疵のない契約文書に対してペンの力を行使して、そうして法的ないし書記術的にその文書が無効とする方法を編み出す。<sup>146</sup>そして、地位ないし財産を持つ者のお呼びがあれば、彼らは直ちにそれを行うのである。また特に、この町においては、人の多さゆえに度を越えてたくさんあるワクフについて、そのことがいえる。こうしてワクフは、素性が分からなくなっており、裁判官たちが属する学派の違いによって無効となる危険に晒されているのである。ワクフの売却ないし私有化を企てる者がいれば公証人たちはその者と条件を設定し合意する。そうして、詐欺的な行為からワクフを保護するべくそうした者たちの行為を禁じ妨げようとする裁判官たちに対抗するのである。こうして、損害がワクフに広まり、その危険は契約文書や私有財にまで及んでいく。そこで私は神の助けを借りてそうした不正を終わらせるべく働いたのであるが、そのことで公証人たちは私に憤り、私への憎しみを募らせたのであった。

ついで、私は「自らの学派である」マールク派のムフティーたち<sup>147</sup>に注意を向けた。裁判官たちは、たびたびムフティーが抵抗し、彼らが訴訟の当事者たちに悪事を吹き込み、そして判決の下った後でファトワーを出すことに悩まされていた<sup>148</sup>。また彼ら（ムフティー）の中には取るに足らない者がおり、彼らはかろうじて学生や公証人の端くれに加わっているが——いや、ほとんどそれらですらないのであるが——、突然ムフティーやマドラサ教授へ拔擢されてその地位に座し、無分別にもそこに居座り続け、非難する者やその適性を批判する者や篩にかける者もいまま、その地位を保持するのである。というのも、彼ら（ムフティー）の数の多さはこの町の住民の多さ故に群を抜いているためである。この町において、ファトワーの筆は無制限にふるわれ、ファトワーの手綱は手離されたままである。そして、訴訟の当事者は皆、その端綱を互いに引き合ったり、その端をつかもうとしたりする。それを頼りに、訴訟相手に勝とうとし、「何かを」強要しようとするのである。ムフティーは、これを受けて、学説の違いの隘路を縫い、助けを求める者を満足させ、要求通りのものを与えるのである。<sup>149</sup>その結果、諸々のファトワーは衝突し、互いに反駁しあい、判決が下った後にファトワーが出されようものなら、混乱に拍車がかかるのである。諸学派間の学説

の相違は多々あり、中庸を得ることは困難であり、ムフティーの資質とファトワーの良し悪しについては、一般民衆にそれを測ることはできない。それ故、この悪弊<sup>150</sup>が取り除かれることは望むべくもなく、またこの混乱が断たれることもないだろう。

そこで私はこのような状況に対して真実の大鉦をふるい、好き勝手に振る舞う者たちと無知な輩の手綱を引き締め、彼らを元の状態に戻したのである。ところで彼らの中にはマグリブからやってきて、徒党を組んでいる者たちがいた。彼らはあれやこれやの諸学の専門用語を断片的に用いて常に人を欺き、高名な師匠に師事しているわけでもなく、学芸に関して何らかの著作があるわけでもなかった。また彼らは世間をあざけりの対象となしており、人の名譽を汚し、また冒すべからざるものを責めたてる会合を開いていた。そのため、私の行いによつて、彼らは私を嫌い、また妬み、怨んだのであった。また彼らは、敬神を装って修道場<sup>151</sup>に住んでいる仲間のもとへ行く。彼らはその敬神ぶりによつて名声を購い、それによつて神に抗い人を庇うのである。權利を侵害された人々が彼らを仲裁者として選ばざるを得ないこともある。すると彼らは、悪魔の言葉に基づいて仲裁し、勝手に解決してしまう。無知なまま神の法を取り扱うことを、彼らの信仰心とやらが妨げることもないのである。

そこで私は彼らの手中にある綱を断ち切り、また彼らが保護している人物を神の法に従って裁いた。彼らの保護は、神の前では何一つ役に立たなかったのである。結果、彼らの修道場は打ち捨てられ、収入の源泉は涸れた。彼らは嘘偽りでもって、私の名譽を損ない面目を潰すべく、愚かな者たちと妄言を語りはじめた。彼らはその嘘偽りを人々に広め、<sup>152</sup>スルターンに対して私への不満をひそかに吹き込んだのである。しかしスルターンは彼らに耳を貸さなかった。

一方、私はそのような状況にあつて、来世での神の報いを見越して、その試験に耐えた。またその状況下で無知なる者どもを避けた。また、厳格に振る舞い、活力を持ち、公正な行いと諸權利の回復を強く望み、誤った計画に誘われてもそれに与せず、地位や利益に敏い人物が私に目配せしても断固としてそれを拒み、正道を歩んだのである。しかし同僚のカーディーたちはそうではなかった。彼らはそのことで私に異を唱え、自分たちのやり方に従うよう、私に要求したのである。すなわち、大物を満足させ、名士に敬意を払い、地位ある人に有利なように目に見える形で裁きを行えというのである。



あるいは、それが困難な場合、代わりの裁判官が存在するならば、裁きを行うことは当該裁判官の義務ではないという原則に従って、訴訟人を追い払うことを要求した。実のところ、「たらい回しにする」算段がついていると知っていながらである。その逆が正しいと知りつつ、目に見える形で判決を下すことについて、彼らが何と弁解するかを知りたいものだ。預言者——神の祝福と平安が彼の上にありますように——はその様な判決について言っている。すなわち、「私がある男に、その同胞の所有するものの一部を奪って与える判決を下したとすれば、それは地獄の一部を切り取って与えたのである」<sup>149</sup>と。

そこで私は、そういったこと全てにおいて、カーデイーの職務の本分を全うし、その職務と私を任じた方への責任を果たすことにみに専心した。そのため、皆が私に敵対して団結し、私に対して不満を叫ぶ人を援助し、私を非難するウンマを形成したのである。そして彼らは、かつて公証の役目を禁じられた者たちに対し、私の彼らへの処置はその権利を欠いていたのであり、それは証人が不適格であることについて私が知っている事のみに基づいているが、*[[p.259]]*それは本来法学者の合意を要する事案であると吹き込んだのである。こうして、人々は口々にものを言い始め、雑音が大きくなった。ある者が自分たちの意に沿って裁きをするよう私に望んだが、私はその審理を止めた。すると人々は訴訟の当事者たちをけしめつけた。そして彼らはスルターンのもとで口をそろえて私への不満を訴えた。スルターンはその件を調査するために、カーデイーたちとムフティーたちを一同に集めた。そこで私は先の裁きを、何一つ混ざっていない純金の如く、純粹なものであると主張した。そこで事の真相がスルターンに明らかとなった。私はこの裁きにおいて、彼らの意向に沿わない形で、神の法に基づいて裁いた。そこで彼らは「かようにしつかと腹を決め早々と出掛けて」<sup>150</sup>行き、スルターンの近臣や重臣に対して耳打ちし、私が彼ら（近臣や重臣）の地位を無視し、また彼らの執り成しを否定しているとして悪様に罵り、私のそうした行為は「カーデイー職の」不文律に無知なためであると言いつくろった。また、この出鱈目を、彼らが私に由来するとみる重大事と併せて広めた。それは、寝ている者をも起こし、分別のある者をもいきり立たせることである。そして彼らは、私に対する怒りを掻き立て、憎しみを植え付けたのである。神は彼らに報いを与え、また問い質す者なり。

そのため、私に対する騒ぎがあらゆる方面で多くなった。そして私と王朝

の人々の間に暗雲が立ち込めた。同じ時期に妻子らへの災厄が重なった。彼らはマグリブより船でやってきていたが、大嵐が襲い、船が沈んでしまったのである。私は財産、家人、子供を失ってしまい、不幸と悲しみが大きくなり、俗世を離れたいという思いが強くなった。そして私はカーデイー職を辞すことにした。*[[p.260]]*しかし、私の相談に乗って忠告してくれた人は職を辞すことに賛成しなかった。それはスルターンの責めと怒りを恐れていたことであつた。そのため私は行くことも戻ることもままならず、希望と絶望をつなぐ道の上で立ち尽くした。やがて、私のもとに主の恩寵が届き、スルターン——神が彼を助け給わんことを——の恩顧が私を包んだ。スルターンは、慈悲の眼差しで私を見つめ、私とその重責を担い得ず、また連中が主張するところによると、その職の不文律について無知である私をその任から解いてくれた。そしてスルターンはその職を前任者に戻し、私をその枷から解き放ったのである。こうして、私は自由の身となったわけであるが、私の実績は賞賛され、また大勢の人が残念がり、私のために祈願し、賛辞を述べつつ見送ってくれたのである。人びとは慈悲の眼差しで私を見つめ、私の復帰を望んで互いにささやき合っていた。私は以前と同じように、スルターンの恩顧の牧場の中、寵愛と配慮の蔭のもとで草を食む者となった。そして私は、神の使徒——神の祝福と平安が彼の上にありますように——が主から求めた善き健康<sup>151</sup>に満足し、教授や読書、あるいは執筆に勤しみ、余生を神に奉仕して過ごせるよう、また神の恩恵と恩寵によって幸福への障害が取り除かれるよう期待していた。

#### 【註】

(1) 前号までの余録は終わり、ここから話は本筋に戻る。以下のテキストはブーラーク版にも含まれており、余録とは異なり最初から自伝に含まれていたものと考えられる。「イブン・ハルドゥーン自伝6」、四四頁、註三四参照。

(2) マリーーン朝君主アブー・ファリス・アブドゥルアズィーズ。一三七〇年にトレムセンを征服したこの君主の中央マグリブ経営のために、イブン・ハルドゥーンはアラブ遊牧民の協力を取り付けるなどして働いていた（イブン・ハルドゥーン自伝5」、九一—九三頁）。

(3) 一三六六年以降、イブン・ハルドゥーンを保護していたビスクラの支配者（「イブン・ハルドゥーン自伝5」、七八頁）。

(4) 都市ビスクラに拠点を置くムズニー家は、一四世紀にはザーフ地方のオアシス地帯の徴税権を掌握するとともに、周辺のアラブ遊牧民リヤーフ族とおおむね良好

な同盟関係を維持していた。ハフス朝、ザイヤーン朝、マリーン朝といった王朝国家に協力する際には、ムズニー家が財政的に支援する一方で、リヤーフ族が軍事力を提供するという役割分担が見られた (Michael Brett, "Ibn Khaldūn and the dynastic approach to local history: the case of Biskra," *al-Qantara* 12, 1991, pp. 157-180)。

- (5) マリーン朝に仕えるアラブ遊牧民スワイド族の指導者で、イブン・ハルドゥーンとも親交があった (イブン・ハルドゥーン自伝5「一〇一頁、註一一」)。
- (6) マリーン朝君主アブー・ファリス・アブドゥルアズィーズは、イブン・ハルドゥーンがビスクラを發つた翌月、七七四年ラビーウ・サーニー月二二日／一三七二年一〇月二二日にトレムセンで没した (*al-Ibar*, vol. 7, p. 336)。
- (7) マリーン朝君主サイード二世 (イブン・ハルドゥーン自伝3「六五頁、註八五」)。即位時にはまだ四歳にも満たない幼児であった。イブン・ハルドゥーンは彼のクンヤをアブー・バクルと記しているが、同時代にフェズで活躍したイブン・アフマルはアブー・ザイヤーンと記している (*al-Ibar*, vol. 7, p. 351; Ibn al-Ammar, *Rawdat al-nisrīn fī dawlat Banī Marīn*, ed. 'Abd al-Wahhāb ibn Mansūr, Rabat: al-Maktaba al-Malakīya, 1991, p. 44)。
- (8) マリーン朝のワズィール。前君主アブー・ファリス・アブドゥルアズィーズの治世には、イブン・ハルドゥーンと協力して中央マグリブ平定に従事した (イブン・ハルドゥーン自伝3「六五頁、註八六」; イブン・ハルドゥーン自伝5「九二―九三頁」)。
- (9) アッターフ族はミルヤーナ近辺を活動地域とするズグバ系アラブ遊牧民。ヤアクーブ・イブン・ムーサー家はその中の指導的な家系 (*al-Ibar*, vol. 6, pp. 48, 118; 「イブン・ハルドゥーン自伝5」「九四頁、註七」)。
- (10) スワイド族はバトハーから南方の山岳地帯を活動地域とするズグバ系アラブ遊牧民。マリーン朝君主アブー・ハサンの中央マグリブ経営に協力したアリーの息子たちが、その有力者であった (イブン・ハルドゥーン自伝5「九四頁、註七および一〇〇頁、註一〇五」)。
- (11) ザイヤーン朝君主アブー・ハンムー二世。一三七〇年にマリーン朝のアブドゥルアズィーズにトレムセンを奪われ、サハラ砂漠へと逃れていた (イブン・ハルドゥーン自伝5「九二―九三頁」)。
- (12) Tugarīn. トレムセンの南方、サハラ砂漠のはば中央に位置するオアシス。トゥワート地方の北東方向に位置する (*al-Ibar*, vol. 6, pp. 67, 102)。
- (13) ウバイドウッラー族はマアキル族を構成する三つの主要な支族の一つで、北はトレムセンやムルウィーヤ川の河口一帯から、ザー川を経て、南は遠くサハラ砂漠のオアシスであるトゥワート地方を活動地域としていた (*al-Ibar*, vol. 6, p. 61)。

マアキル族については「イブン・ハルドゥーン自伝5」一〇一頁、註一一五も参照。

- (14) Wādī Zā. サール川 Wādī Zā と綴る。アヤソフィヤ写本では Z の文字と S の文字を重ねて表記している。ムルウィーヤ川の支流のひとつ。その水源というラアス・アル・アインは、校訂者によれば現在のアイン・バニー・マトハルにあたる。
- (15) Jabal Dabū. ムルウィーヤ川の東に位置する山地。同名の町が近くにある。当時はマリーン族の支族ワングースイン族のイブン・ザクダーンがこの地方を支配しており、イブン・ハルドゥーンとも親しいワナズマール・イブン・アリーフとともにザイヤーン朝に対する最前線を担っていた (*al-Ibar*, vol. 7, pp. 128, 329; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on "Dabū")。
- (16) マリーン朝のワズィール、ムハンマド・イブン・ウスマーン・イブン・カースのこと。アブー・バクルとは「父方の従兄弟」とあるが厳密には二人の曾祖父が兄弟同士にあたる (イブン・ハルドゥーン自伝3「六五頁、註八八」)。
- (17) マリーン朝君主アブー・サリムの権力獲得 (一三五九年) の際のイブン・ハルドゥーンとムハンマド・イブン・ウスマーンとの関係については、「イブン・ハルドゥーン自伝4」七二頁参照。
- (18) ナスル朝君主ムハンマド五世 (イブン・アフマル) のワズィールだったイブン・ハティーブは、当時はグラナダを出兵してマリーン朝に仕えていた (イブン・ハルドゥーン自伝5「九三―九四頁」)。
- (19) スイジェルマールサを拠点に度々フェズの王権に反旗を翻してきたマリーン朝のアブー・アリー家出身の王族。一三六五年にアンダルスに渡り、一三六七年以降はシャイフ・アル・グザート (ナスル朝におけるマグリブ兵部隊の指揮官) としてナスル朝の軍事の要職を占めたが、この時期には解任されグラナダで投獄されていた (イブン・ハルドゥーン自伝3「六六頁、註九〇」; イブン・ハルドゥーン自伝5「八五頁」)。
- (20) マリーン朝に仕えたワズィール。アブドゥッラフマーン・イブン・アビー・イファッル・サンとともにアンダルスに渡ったが、この時にはともにグラナダで投獄されていた。彼もまたアブー・サリムの権力獲得の時代からのイブン・ハルドゥーンの知己である (イブン・ハルドゥーン自伝4「九二頁、註八二」; イブン・ハルドゥーン自伝5「八五頁」)。
- (21) マリーン朝君主アブドゥルアズィーズは、フェズの王権にとって脅威となりうるアブドゥッラフマーン・イブン・アビー・イファッル・サンの力が増大することを懸念し、イブン・ハティーブの協力をえて彼を陥れようとした。この結果、アブドゥッラフマーンはナスル朝君主ムハンマド五世の怒りを買ひ、一三六八―九一年に解任され投獄された (*al-Ibar*, vol. 7, p. 378; Miguel Ángel Manzano Rodríguez,

- La intervención de los Benimerines en la península ibérica*, Madrid: CSIC, 1992, p. 365)。
- (22) Ghassāsa. 奥マグリブ北部の地中海に面する港町。一四世紀には荒廃していたメリリヤに代わって、ガッサーサがこの地域の主要な港町だった。周辺にはサンハージャ系ベルベルのバットゥーヤ族が居住していた (*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on “Melilla”)。
- (23) 当時、ジブラルタルの港と城砦は、マリーン朝がジブラルタル海峡のアンダルス岸に有する唯一の拠点だった (イブン・ハルドゥーン自伝 4「九五頁、註一二七」)。イブン・ハティープの身柄引き渡し要求に端を発したこの一連の事件の結果、ジブラルタルはナスル朝に引き渡され、海峡北岸からマリーン朝の軍勢は完全に撤退することになった (二七四年)。さらに、ナスル朝に協力的な新君主アブー・アッバースが即位したこともあり、ナスル朝とマリーン朝の力関係は完全に逆転し、前者が主導権を握るようになった (関哲行・立石博高・中塚次郎編『世界歴史大系 スペイン史 1 古代―近世』、山川出版社、二〇〇八年、一二三頁)。
- (24) マリーン朝君主アブー・サリムの子で、この後フェズの王権を掌握するアブー・アッバース・アフマドのこと (イブン・ハルドゥーン自伝 3「六五頁、註八七」)。
- (25) *kudyat al-ʿArāʾis*. フェズ郊外の丘。王宮のある新フェズを西側からのぞむ場所に位置していた (Ibn Khaldūn, *Histoire des Berbères et des dynasties musulmanes de l'Afrique Septentrionale*, Nouvelle édition, 4 vols., tr. M. de Slane, Paris, 1956, vol. 4, p. 512)。
- (26) メクネスの北約二〇キロメートルに位置する山。八世紀末にイドリース朝を開いたイドリース一世の墓廟があり、現在では彼の名にちなんでムーライ・イドリースと呼ばれる町がある (*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on “Mawlay Idris”)。
- (27) al-*ahāf*. アラブ遊牧民マアキル族の支族マンスール族のさらに支族のうちイムラーン族 (*awlād ʿImrān / al-ʿAmrīna*) とムナッバー族 (*awlād Munabbāʾ / al-Munabbāʾ*) の二つをあわせてアフラーフと呼ぶ。サハラ砂漠のスイジェルマサからムルウィーヤ川流域、さらには地中海沿岸のガッサーサ地方を活動地域としていた (*al-ʿIḥār*, vol. 6, pp. 66-67)。
- (28) *ʿAlī ibn ʿUmar al-Wayʿalānī*. マリーン朝の支族ワルターッジャン家の有力者。ワズィールのアブー・バクル・イブン・ガズィイーに反抗してスース地方へ逃れていたが、アブドゥッラフマーン・イブン・アビー・イファッッルサン上陸の知らせを聞いて、アラブ遊牧民マアキル族とともに彼に合流した。フェズ攻略後は、一旦はアブドゥッラフマーンと行動を共にしてマラケシュへ向かうが、やがて関係が悪化してフェズに戻った (*al-ʿIḥār*, vol. 7, pp. 325, 344)。
- (29) 奥マグリブの大西洋沿岸、オート・アトラス山脈とアンチ・アトラス山脈にはさまれたスース川の流域 (*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on “al-Sūs al-Aksā”)。
- (30) *Safṭū*. フェズの平原を見下ろすモワイヤン・アトラス山腹の町。校訂テキストおよびアヤソフィヤ写本のいずれにも *Safṭū* とあるが、ブーラク版や仏訳に従った (*al-ʿIḥār*, vol. 7, p. 442; *Autobiographie*, p. 147)。
- (31) フェズとメクネスの間を流れるセブール川の支流。
- (32) 一三世紀後半にフェズの西郊に建設されマリーン朝の王宮が置かれた都市。 (イブン・ハルドゥーン自伝 2「五二頁、註一〇八」)。
- (33) サハラ砂漠北縁の交易都市 (イブン・ハルドゥーン自伝 3「六三頁、註六四」)。アブドゥッラフマーン・イブン・アビー・イファッッルサンの祖父アブー・アリーはここを拠点としていた。
- (34) 現在のモロッコ南部を流れる川。アトラス山脈から南のサハラ砂漠方面に流れ出し、途中から西流して大西洋に注ぐ。夏季には涸れ川となる区間が多いが、流域には水場が点在し遊牧民の活動の拠点となっている (*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on “Darʿa”)。
- (35) モワイヤン・アトラス山脈から発する川。メクネスの西を北方へ流れて大西洋の近くでセブール川に合流する。
- (36) *Asfī*. 奥マグリブの大西洋沿岸の港町 (*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on “Asfī”)。
- (37) *Karṣī*. ムルウィーヤ川沿いの町。フェズからターザを経て中央マグリブへ至る途上に位置する (*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on “Karṣī”)。
- (38) *Sulaymān ibn Dāwūd ibn ʿAṭīb al-ʿAskarī* (一三七九―一八〇年没)。マリーン家の支族アスカル家出身のワズィール。マリーン朝君主アブー・イナーンの頃から、ジブラルタル太守やイフリーキヤ遠征の指揮をつとめるなどマリーン朝宮廷の実力者だった。アブー・アッバースのフェズ包囲に協力し、権力獲得後は彼の政権の重鎮の一人となった。後述のイブン・ハティープ処刑は、彼の部下が手を下したものである。その背景には、かつてスライマーンがシャイフ・アル・グザート職を求めた際にイブン・ハティープの進言により阻まれたため、恨みを抱いていたことがあった。一三七六―七七年、アンダルスに外交使節として赴いた際にそのまぐラナダに残留し、同地で没した (*al-ʿIḥār*, vol. 7, pp. 296-299, 341-343)。
- (39) イブン・ハルドゥーン弟ヤフヤーについては、「イブン・ハルドゥーン自伝 5」九五頁、註一八参照。
- (40) *Ibn Zamrak*, *Abū ʿAbd Allāh Muḥammad ibn Yūsuf* (一三三三―一三九五)。グラ



ナダの詩人。イブン・ハティープの後押しもあって、ナスル朝の宮廷詩人・書記として台頭した。一三七二年のイブン・ハティープ出奔後はワズイルに任じられ、事実上、彼の後継者としてムハンマド五世の治政後半を支えた。一三九一年にムハンマド五世が没すると彼の地位は不安定化し、最後はムハンマド七世の命により暗殺された (J. Lirio Delgado ed., *Biblioteca de al-Andalus*, Almeria: Fundación Ibn Tuḡayl, 2004-2012, tomo 6, pp. 238-251; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on "Ibn Zamrak"). この時のイブン・ザムラクのマグリブ渡航は、アブー・アッバースの即位を祝うだけでなく、フェズでイブン・ハティープに対する審問を実施するためであった (*al-Iḥṣān*, vol. 7, pp. 341-342)。しかし、イブン・ハルドゥーンとの関係は必ずしも悪くはなかったらしく、『自伝』にもカイロ移住後に彼から受け取った書簡が引用されている (*al-Taʾrīf*, pp. 262-274)。

- (41) イブン・ハティープがグラナダを出奔すると、ナスル朝君主ムハンマド五世はマリーン朝に対して彼の身柄引き渡しをたびたび要請したが、マリーン朝側はこれを拒否していた。しかし、一三七四年にナスル朝の支援を受けたアブー・アッバースがマリーン朝の権力を握ったことで情勢は一変し、イブン・ハティープは異端の嫌疑をかけられてフェズで投獄された。イブン・ハティープ殺害の日付は不明だが、アブー・アッバースが権力を掌握した直後、グラナダから使節としてイブン・ザムラクがフェズに到来した時のことではないかと考えられている (*al-Iḥṣān*, vol. 7, pp. 341-342; J. Lirio Delgado ed., *Biblioteca de al-Andalus*, tomo 3, pp. 656-657; Maria Isabel Calero Secal, "El proceso de Ibn al-Jarḥ", *al-Qanāna* 22, 2001, pp. 421-461)。

- (42) イブン・ハルドゥーンが、マリーン朝君主アブドゥルアズィズに協力して、アブー・ハンムー二世からアラブ遊牧民を離反させたことを指す。「イブン・ハルドゥーン自伝5」、九二―九三頁参照。

- (43) アラブ遊牧民スワイド族の有力者。この当時は、マリーン朝に協力する兄弟ワナズマールの助言により、ザイヤーン朝君主アブー・ハンムー二世の中央マグリブ平定に力を貸していた (*al-Iḥṣān*, vol. 7, pp. 135-136)。イブン・ハルドゥーンに対する好意的な態度は、かつてアブー・ハンムー二世に捕らえられていた際に彼の尽力で救出されたことがあったためであろうか。「イブン・ハルドゥーン自伝5」、九二―九三頁参照。

- (44) Mandās. シャラフ川下流の低地バトハーから南のアトラス山脈方面に入ったところにある町。さらに南へ進んでグズール山を越えると、八世紀にルスタム朝が建設した都市ターハルトがある (*al-Iḥṣān*, vol. 7, p. 121)。

- (45) Qat'at Ibn Salama. ターハルト近くの城塞。別名ターウグズート。ベルベル系部族トゥージン族の有力支族ヤドララン族の指導者サラーマが一三世紀に築いた

ため、その名で知られるようになった。サラーマの子孫はここを拠点に勢威をふるっていたが、やがて隣接地域で活動するアラブ遊牧民スワイド族に圧迫されるようになった。一三五二年にマリーン朝君主アブー・イナーンがトレムセンを征服すると、これに協力したスワイド族のワナズマール・イブン・アリーフがカル・ア・イブン・サラーマと周辺のトゥージン族の地をイクターとして与えられた。マリーン朝撤退後、復興したザイヤーン朝はこの地域の統治を一時サラーマ家に委ねるが、結局はスワイド族の歓心を買うためにイクターとして再度アリーフ家に与えられた。イブン・ハルドゥーンによれば、当時のトゥージン族はスワイド族から税を取り立てられる従属状態にあったという (*al-Iḥṣān*, vol. 7, pp. 163-165)。

- (46) al-Muqaddima. いわゆる『歴史序説』は、本来は、彼の自伝とともに大部な史書『省察すべき実例の書』の一部をなすものである。『歴史序説』の初稿が完成したのは、七七九年半ば／一三七七年秋のことだった (*Prolegomenes*, vol. 3, p. 434; 『歴史序説』第四巻、三四七頁)。

- (47) Abu Bakr Ibn Arṭū. アラブ遊牧民スワイド族の有力者で、ワナズマールやムハンマドの兄弟 (イブン・ハルドゥーン自伝5)、一〇〇―一〇一頁、註一〇五、一七)。

- (48) イブン・ハルドゥーン自身が言うように、彼の史書は序論と三部とに分かれている。すなわち、序論で歴史学の真価について、第一部で文明の本質的性格について論じたうえで、第二部でアラブ人をはじめ古代の諸民族やベルシヤ人、トルコ人などの歴史について、第三部でベルベル人およびその一派であるザナータ族の歴史を扱うとしている (*Prolegomenes*, vol. 1, p. 6; 『歴史序説』第一巻、二九―三〇頁)。ここでいう『序説』とは、このうちの序論と第一部 (すなわちいわゆる『歴史序説』) のことであり、「アラブとベルベルとザナータの諸情報」とは第二部と第三部のことであろう。

- (49) dawāwīn は *ḥisāb* の複数形で「帳簿類」もしくは「詩集」を意味するが、本書の原題『省察すべき実例の書』アラブ人、ベルシヤ人、ベルベル人および彼らと同時代人の偉大な支配者たちの初期と後期の歴史に関する集成『*Kitāb al-Iḥṣān wa dīwān al-mubadda wa al-khabar fī ayyām al-ḥarb wa al-ḥijām wa al-Barbar wa min ṭāwā-hum min dhawī al-sulṭān al-akbar*』では「集成」の意味で用いられている。この点を踏まえて「資料類」と訳出した。

- (50) marādun awṭā bī al-ṭhanīya は直訳すれば「山道に私を至らしめる病」だが、*al-ṭhanīya* には四本の前歯の意味もありそこから「死の」間際に」のニュアンスととった。

- (51) ハフス朝君主アブー・アッバース・アフマド二世のこと (イブン・ハルドゥー

- ン自伝3」、七一頁、註一五七)。ハフス朝の王族でコンスタンティーンに割拠していたが、一三七〇年に首都チュニス征服し、ハフス朝再統一を果たしていた。一三六六年に彼が従兄弟アブー・アブドゥッラーを破ってビジャーヤを奪取した際には、アブー・アブドゥッラーに仕えていたイブン・ハルドゥーンがビジャーヤ開城を取り切った(イブン・ハルドゥーン自伝4「八七一八頁」)。
- (52) al-Akhdar. アラブ遊牧民リヤーフ族の一支族(*al-Ibar*, vol. 6, p. 36)。リヤーフ族については「イブン・ハルドゥーン自伝4」、九八頁、註一七三参照。
- (53) リヤーフ系アラブ遊牧民ダーウード族の指導者(イブン・ハルドゥーン自伝4「九八頁、註一七五」)。イブン・ハルドゥーンは彼と親交があり、彼に働きかけることでアラブ遊牧民をザイヤーン朝君主アブー・ハンムー二世やマリーン朝君主アブー・ファールイスのために動員させることができた(イブン・ハルドゥーン自伝5「九〇―九二頁」)。
- (54) Farfār. ビスクラとダウサンのはば中間に位置するオアシス。ダウサンについては「イブン・ハルドゥーン自伝5」、一〇二頁、註二一〇参照。
- (55) Abū Ishāq Ibrāhīm ibn Abī al-Abbās Ahmad (一三八九―九〇年没)。チュニスを占領してハフス朝を統一したアブー・アッバースは息子たちを支配下の各都市の太守に任じたが、そのうちコンスタンティーン太守に任じられたのがイブラーヒームである。彼は後にヤアクーブ・イブン・アリーやその息子たちと対立し、コンスタンティーンに迫るアラブ遊牧民を迎撃するための陣中で病没した(*al-Ibar*, vol. 6, pp. 386-387, 399)。
- (56) ヤアクーブ・イブン・アリーの兄弟アブー・ディーナールについては「イブン・ハルドゥーン自伝5」、一〇二頁、註二三参照。アブー・ディーナールの息子については、不詳。
- (57) biād al-Jarīd. 現在のチュニジア西南部、ジャリード塩湖を取り囲む地方。原義は「ナツメヤシの葉」の意。サハラ砂漠の北縁にあたりトゥーザルなどのオアシス都市があった。トゥーザルのヤムルール家のような在地有力者やアラブ遊牧民が割拠していたが、アブー・アッバースやその子アブー・ファールイス(在位一三九四―一四三四年)が繰り返し遠征をおこなうと、ハフス朝の支配が及ぶようになった(*al-Ibar*, vol. 6, p. 101; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on “Djārid”)。
- (58) mawla-hu Farīh. ハフス朝君主アブー・アッバースの解放奴隷であろう。イブン・ハルドゥーンがチュニスに滞在していたこの時期はチュニスの留守役を委ねられているが(本訳稿七六頁も参照)、アブー・アッバースがチュニスを手にする前はコンスタンティーンスの城塞の守備を委ねられていた(Ibn Qunfudh, *al-Fārisiyya fi mabādi’ al-dawla al-Haqīqiyya*, ed. Muḥammad al-Shādhīf & ‘Abd al-Majīd al-Turkī, Tunis, 1968, p. 186)。なおアブー・アッバースの兄弟アブー・アブドゥッラーに仕えたファールーフとは別人(イブン・ハルドゥーン自伝4「六七頁参照」)。
- (59) Yalṣā Ibn Muḥammad ibn Ahmad ibn Yamīl (一三八〇年没)。祖父の代からトゥーザルを支配するヤムルール家の当主。ヤフヤーは一三六六年に父の旧領を取り戻した後、チュニスのハフス朝から自立してこの地域を支配し、「王」のごとくふるまっていたという。本文にあるようにイフリーキヤ南部の支配をねらうハフス朝君主アブー・アッバースの攻撃を受けてトゥーザルを失い、約一年後に亡命先のビスクラで没した(*al-Ibar*, vol. 6, pp. 387-388, 415-418; vol. 7, pp. 138-139)。ビスクラのアフマド・イブン・ムズニーのもとにはヤフヤーの姉妹が嫁いでおり、両者は姻戚関係にあった(*al-Ibar*, vol. 6, p. 412)。
- (60) Muḥammad al-Muntasir ibn Abī al-Abbās Ahmad. この後、ジャリード地方の統治を担うが、ヤムルール家が完全に衰微したわけではなく再びトゥーザルを奪われることもあった(本訳稿七六頁参照)。一三九四年に父アブー・アッバースが没し兄弟のアブー・ファールイスが即位すると、近隣の町に隠退した(*al-Ibar*, vol. 6, pp. 389, 395-396, 398, 401, 403)。
- (61) Tūzar. ジャリード塩湖の北西に位置するジャリード地方の首邑。アラブ・ムスリムの征服の頃からこの地に住むというヤムルール家が、在地の有力家系として勢力をふるっていた(*al-Ibar*, vol. 6, pp. 412-419; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on “Tūzar”)。
- (62) Naṭīa. トゥーザルの西約二〇キロメートルに位置するジャリード地方のオアシス都市。トゥーザルのヤムルール家と同様の在地の有力家系にハラフ家がいた(*al-Ibar*, vol. 6, pp. 412-419; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on “Naṭīa”)。
- (63) Naṭāwa. ジャリード地方のうち、ジャリード塩湖の南東に位置する地域。同名のオアシス都市もある。元来ナフザーワはベルベル系部族の名で、彼らの活動範囲はマグリブ全域に広がっていたが、地名としてはこの地域を指すことが多い(*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on “Naṭāwa”)。
- (64) Abū Bakr ibn Abī al-Abbās Ahmad (一三九七年没)。ハフス朝君主アブー・アッバースの長子。この時ガフサの太守に任じられたが、翌年チュニスに戻った。一三九四年に父アブー・アッバースが没した際には、直前にコンスタンティーン太守に任じられてチュニスを離れていたため、次の君主には弟アブー・ファールイスが即位した。しばらくは自立を保っていたが、一三九六年にコンスタンティーンを占領され、捕らわれの身のまま翌年没した(*al-Ibar*, vol. 6, pp. 388, 400, 403; Ibn Qunfudh, *al-Fārisiyya*, pp. 190-193; Ibn Hajar, *Inbā’ al-ghumr bi-abnā’ al-umr*, 4 vols., ed. Ḥasan Ḥabashī, Cairo, 1969-98, vol. 1, p. 558)。
- (65) Qafsa. トゥーザルの北東約九〇キロメートルに位置する都市。在地の有力家系にアービド家がいた(*al-Ibar*, vol. 6, pp. 412-419; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed.,

Article on “Kafsa”。

- (66) ファトワーとは、信仰や社会生活に関するムスリムの疑問に対して、法学者が口頭ないし文書で提示する法的な回答（法的見解）のことで、そのファトワーを提示する者をムフティーと呼ぶ。「ファトワー」「ムフティー」『岩波イスラーム辞典』・堀井聡江『イスラーム法通史』山川出版社、二〇〇四年、一四一―一五七頁）。なお、イブン・アラファが任命されたこの職を「イスラームのシャイフ」と記す史料もあり、後のオスマン朝で見られる制度化されたシェイヒュル・イスラーム職のように、国家がファトワー発行を統制しようとしていたものではないかと考えられている（Saad Ghraib, *Ibn 'Arfa et le mātisme en Ifriqiya au VIIIe-XIe siècles*, 2 vols., Tunis: Université de Tunis I, 1992-6, vol. 1, pp. 345-348）。

- (67) Abū 'Abd Allāh Muḥammad ibn 'Arfa al-Warḥamī al-Tunī (一二六―一四〇一年)。ハフス朝期のイフリーキヤを代表するマールイク派法学者。イフリーキヤ東南部のベルベル系家系に生まれ、チュニスで学問を修めた。一三五〇年頃からチュニスの金曜モスクであるザイトウーナ・モスクの導師を務め、一三七〇年には説教師（ハティーブ）も兼ねた。さらに翌年にはファトワーのシャイフ職に任命されるなど、当時のチュニスで最も権威ある法学者だった。一三九〇年から翌年にかけてメッカ巡礼をおこなった（Ghraib, *Ibn 'Arfa et le mātisme*, *Encyclopedia of Islam*, 2nd ed., Article on “Ibn 'Arfa”）。イブン・ハルドゥーンとは不仲で、後にイブン・ハルドゥーンがエジプトでカーデー職に任じられると、それを知ったイブン・アラファは、もはや自分はカーデー職を重要な職とは見なさない、と言い放ったという（al-Sakhāwī, *al-Daw' al-Lāmi' li ahl al-qarn al-āsi*, ed. 'Abd al-Latīf Hasan 'Abd al-Rahmān, Beirut: Dar al-Kutub al-Ilmiya, 2003, vol. 4, p. 130）。二人の不仲については、伝統的なマールイク派法学の立場と『歴史序説』に見られるような斬新な発想との違いが関係しているという指摘もある（Ibn Khaldūn, *The Muqaddimah: An Introduction to History*, tr. Franz Rosenthal, Princeton: Princeton University Press, 1967, vol. 1, p. lvii）。

- (68) akhbār al-dawlayn. 仏訳者はこれを「アラブの最初の二王朝」と訳している（*Autobiographie*, p. 154）。具体的にどの王朝を指すにせよ、『省察すべき実例の書』のうち、アラブや古代の諸民族のことを扱う第二部の冒頭部分を指しているであろう。

- (69) nār al-qirā. 「もてなしの火」は砂漠の民が己の寛大の美德を誇示すべく、夜旅をする者への道しるべとしたり、客人として歓迎する意志表示として、砂丘の小高く目立つところに焚いた火（堀内勝『砂漠の文化：アラブ遊牧民の世界』教育社、一九七九年、二一〇―二一一頁）。

- (70) この箇所は訳者補筆としてハフス朝をあてた仏訳に依った。

- (71) マフデーとは、一二世紀の宗教運動家イブン・トゥーマルトのこと。神の唯一性（タウヒード）は全ての信徒が認めるイスラームの根本教義だが、イブン・トゥーマルトとその信奉者は自分たちこそが真の一神教徒（ムワッヒドゥーン）であると主張し、後のムワッヒド朝の母体となった。ハフス朝もマフデー・イブン・トゥーマルトの運動の正統な後継者であることを建国の理念としていた（イブン・ハルドゥーン自伝2、四五頁、註一四）。しかし、一四世紀末のこの頃は、この理念が最終的に払拭されて伝統的なマールイク派法学への回帰が完成する時期にあたる。マフデー以上に神の唯一性が強調されるこの詩句は、そうした時代状況を反映したものであろうか。

- (72) 「慈愛あまねきお方（ラフマーン）」は神の美名の一つ。数ある神の美名の中から特にこの表現を選んだのは、イブン・ハルドゥーン自身の名がアブドゥッラフマーン（慈愛あまねきお方の僕）の意だからであろうか。

- (73) ハフス朝の名祖アブー・ハフス・ウマルのこと。「真偽を分かち人」、すなわち初期イスラームの第二代正統カリフであるアブー・ハフス・ウマルの子孫と位置づけられていた（イブン・ハルドゥーン自伝7、五四頁、註九六）。

- (74) al-qana. 革槍を指す。革の茎から作られるため、槍の柄に節がある。

- (75) amīr al-nu'mān. イスラーム共同体全体を統べるカリフを示す称号。ムワッヒド朝、およびその正統な後継者を標榜するハフス朝の君主はこの称号を用いていた。

- (76) 一三世紀の初期ハフス朝の威勢を示唆していると思われる。当時、ザナタ系ベルベル部族が建国したトレムセンのザイヤーン朝やフェズのマリーン朝は、いずれもハフス朝の宗主権を認めていた。一方、キリスト教徒の大規模な征服活動により絶望的な状況に陥っていたアンダルスの諸都市は、ハフス朝に救援を求めていた。また、マラケシュのムワッヒド朝は一二六九年に滅亡した。

- (77) Sawla ibn Khalid ibn Hanza. スライム系アラブ遊牧民カアブ族の一派でイフリーキヤ中南部を活動地域とするアブー・ライル家の指導者。彼のおじマンスール・イブン・ハムザは、イフリーキヤの非都市部に絶大な影響力を誇り、ハフス朝君主アブー・アッバースのチュニス征服（一二七〇年）にも大きく貢献した。サウラはその後継者としてアブー・ライル家を率いていた（*al-Iḥṣān*, vol. 6, pp. 79, 389, 392）。

- (78) Dhū'ayb. サウラのおじアフマドの存在はマリーン朝君主アブー・ハサンのイフリーキヤ征服（一二四七年）の際に確認できるが（*al-Iḥṣān*, vol. 6, 359）、その子ズアイブについては不詳。

- (79) アラブ遊牧民マアキル族については、「イブン・ハルドゥーン自伝5」、一〇一頁、註一一五参照。

- (80) Banū Muhallī ibn Qāsim. アブー・ライル家と同様、アラブ遊牧民カアブ族の一



派。ムハルヒル家とアブー・ライル家は、互いに血の復讐を求めて、約一〇〇年間にわたって抗争を繰り返していた。一三八一年にムハルヒル家がハフス朝君主アブー・アッバースから離反した際には、サウラに率いられたアブー・ライル家がこれを討伐するのに協力した (*al-ʿIbar*, vol. 6, pp. 81, 395)。

- (81) *hanzal*. ウリ科の蔓性多年草。球形の液果を結ぶが苦味である。詩語としては人生の悲苦の象徴として用いられる。(ʿIfrāt al-Qaḍī al-Bāshā, Mu 'jam runūz wa dalālat al-azhār wa al-nabātā, Beirut: Maktabat Lubnān, 2005, article on 'hanzal')

- (82) *hawḥ*. 校訂註によると、このくだりは詩人ズハイル・イブン・アビー・スルマーの仕事を意識したものである。彼は七年間に七編のカスィードをものし、一年に一篇書いたことからこれらを「ズハイルの年記群 *hawḥ*」と名付けていた。ズハイルはジャーヒリーヤ時代の『ムアッラカート』七詩人の一人で、ムザイナ族出身(イブン・イスハーク著、イブン・ヒシャーム編註、後藤明・医王秀行・高田康一・高野太輔訳『預言者ムハンマド伝』全四巻、岩波書店、二〇一〇—一一年、第二巻、五八三頁)。

- (83) イブン・ハルドゥーンの史書『省察すべき実例の書』を指す。

- (84) イスラーム時代のアラビア語史料は、古代イエメンにあったヒムヤル王国の王の称号をトゥッバウと表現している。この語は「クルアーン」第四章第三七節と第五〇章第十四節にも見られるが、ヒムヤル王自身は碑文史料において *malik* (アラビア語の *malik* に相当) の称号を用いており、トゥッバウという語の起源については判然としない。

- (85) 旧約聖書において、イスラエル人の仇敵として描かれている遊牧民族。アラブの系譜学では、太古の昔に滅びた「失われたアラブ(アラブ・バィダ)」の一つであったと考えられている。

- (86) クルアーンに登場する民族で「失われたアラブ」の一つ。預言者サーリフを遣わされたが、神の警告を無視したために滅ばされた。この集団名は碑文史料にも登場するため、実在した何らかの集団がモデルになったと推測される。

- (87) クルアーンに登場する民族で「失われたアラブ」の一つ。預言者フードを遣わされたが、神の警告を無視したために滅ばされた。この集団についてはイスラーム時代の文献史料以外に情報がなく、その歴史的事実性も含め、不明な点が多い。

- (88) アドナーン(イブラーヒームの息子イスマーイルの子孫と言われる)を始祖とする北アラブの低位集団だが、ここでは「全北アラブ」と同義。預言者ムハンマドが属するクライシ族はムダル族の一部にあたる (*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., article on 'Rabī'a', 'Mudar'; 高野太輔『アラブ系譜体系の誕生と発展』山川出版社、二〇〇八年、三〇—三二頁)。

- (89) 『歴史序説』として知られる『省察すべき実例の書』の序論を指すと思われる。

- (90) *Jamī' al-Zaytūna*. ザイトゥーナ・モスク(「オリーブのモスク」の意)は、九世紀に建造されたチュニスの金曜モスクで、この町の信仰や学問の中心地だった。当時、このモスクの導師を務めていたのは、イブン・アラファである。彼は、メッカ巡礼で留守にした時を除き、一四〇一年に没するまで約五〇年間この職にあり続けた (*Ghrab, Ibn 'arafa et le malkisme*, vol. 1, pp. 338-345; al-Zarkashi, *Tārīkh al-dawlatayn al-muwahhidīya wa al-hafṣīya*, ed. al-Husayn al-Ya'qūbī, Tunis: al-Maktaba al-ʿAtqa, 1998, pp. 193, 229, 242)。

- (91) この行以降八行分(原文二四二頁—四三頁一行目までの四行。「けれども彼女らは気高く横目でにらんでいた」まで)は難解である。仏訳者もまたこの箇所を訳出不能としている (*Autobiographie*, p. 1286)。おそらく大意は、イフリーキヤの美しい土地や古い遺跡(カルタゴのアーチ橋はやせ衰えながらも誇り高いラクダになぞらえられている)にかけて誓う、ということであろう。

- (92) *al-Fanāya*. ローマ期に水道橋として建造されたカルタゴのアーチ橋を指す(イブン・ハルドゥーン自伝 6「四六頁、註六〇」)。

- (93) *Tasm*. ジャディース *Jadis* とともに前述「失われたアラブ」に属する民族名。最初からアラビア語を母語とした人々として知られる。タスムはヌーフの息子サームの息子ラーウズの息子を名祖とし、ジャディースはサームの息子イラムの息子を名祖とする。タスム族がヤマーマに移住したのち、ジャディース族がこれに加わった (*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., article on 'Tasm'; 高野太輔『アラブ系譜体系の誕生と発展』、六八頁)。校訂註によればこの箇所はハッサーン・イブン・トゥッバアがジャディース族を攻撃した件を意図している。イエメン王であったハッサーン・イブン・トゥッバアはヤマーマでタスム族とジャディース族を攻撃し、ジャディース族を滅ぼした (*al-Tabarī, Tārīkh al-Tabarī: tārīkh al-umam wa al-mulūk*, vol. 1, Beirut: Dār al-Kutub al-ʿIlmiya, 2002, pp. 362, 370-371)。

- (94) アードについては註八七参照。

- (95) *īlay-ka-hā* (この *īlay-ka* は *kuḥ* (取れ) と同義で、この *kuḥ* は *kuḥ* は *īlay-ka* (それを汝の方に取れ) と同義となる(ライト『アラビア語文典』ことう書房、一九八七年、下巻、一四二頁)。

- (96) トプカプ宮殿博物館所蔵のザール写本 (*ʿImnā 2924/13-14*) ではこの箇所はごく短く述べられ、以下のようにすぐ原文二四五頁四行目の記述へと続いている。「それから近臣たちとイブン・アラファの中傷や競争意識や攻撃が多くなり、私は彼らを除けることを選び、スルターンに「巡礼の」義務を果たすべく私の道を開いてくれるよう懇願した。彼は私にそれを許可した。」

- ザール写本は底本アヤソフィヤ写本より以前に成立しているため、この箇所はアヤソフィヤ写本を執筆する段階でイブン・ハルドゥーン自身が新たに詳細な記

述を書き加えたものと考えられる。

- (97) 前出のヤムルール家のヤフヤーが亡命先のビスクラで没した後まもなくして、その子アブー・ヤフヤーがトゥーザルを奪回し、ハフス朝君主アブー・アッバースの息子ムハンマド・ムンタスィルを追放した (*al-Iḥār*, vol. 6, p. 395)。

- (98) al-Malik al-Zāhir: チェルケス・マムルーク朝 (ブルジー・マムルーク朝) の初代スルターン (在位一二八二―一二八九、一三九〇―一三九九年)。一三七八年四月に軍人の最高位であるアターベク (*atābak al-askar*: 総司令) の地位に就き実権を掌握し、一三八二年一月二六日 (七八四年ラマダーン月一九日) にカラウーン家のスルターン・サリーフ・ハーッジー (在位一三八一―一三三二年) を廃し自らスルターンの座についた。一三八九年六月に後に見るミンターシユとヤルプガー・ナースィリーの反乱によって一時スルターンの地位を追われるも、一三九〇年二月にカイロへ戻り、スルターンに返り咲いた。一三九九年六月没 (*Ibn Ḥajar. Iḥbāʾ*, vol. 2, pp. 66-69; *Ibn Taghribirdī, al-Manḥal al-sāʿī wa al-mustawfī baʿda al-wāʿī*, 12 vols, ed. Muḥammad Muḥammad Amīn, Cairo, 1985-2006, vol. 3, pp. 285-342)。

- (99) バフリー・マムルーク朝第八代スルターン・マンスール・カラウーン (在位一二七九―一二九〇年) の一族。彼の没後、バルクークがスルターンとなるまで、バフリー・マムルーク朝時代のスルターン位のほとんどを彼の一族が占めた。

- (100) この年、アミール・アルトゥンブガー Altunbugha al-Jubānī 率いる巡礼団 (*ṭabṭ*) がメッカに行っており、巡礼自体がなかった訳ではない (*al-Maqrīzī, Kitāb al-sulūk li-maʿrifat dawlat al-mulūk*, 4 vols, ed. Muḥammad Mustafā Ziyāda et al., Cairo, 1939-73, vol. 3, p. 483)。<sup>7)</sup> この年の巡礼団の成立日は不明であるが、例年巡礼団はカイロをシャウワール月一六―一九日の間に成立したので (*ʿAbdullāh ʿAnkawī, "The Pilgrimage to Mecca in Mamluk Times," Arabian Studies* 1, 1974, p. 148)。<sup>8)</sup> 翌月にカイロに到着したイブン・ハルドゥーンは間に合わなかったであろう。なおイブン・ハルドゥーンは、エジプトに到来して程なく、このアルトゥンブガーについて得たという (*al-Maqrīzī, Sulūk*, vol. 3, p. 480)。

- (101) ムスリムの伝えるハディースに「アブー・フライラは伝えている。アッラーのみ使いは言われた。『サイハーン河、ジャイハーン河、ユーフラテス河、ナイル河は、全て天国にある河である』とあり、ナイル川が天国の川という認識が読み取れる (磯崎定基、飯森嘉助訳『日訳サヒーフ・ムスリム』全三巻、東京…日本サウディアラビア協会、一九八七年、第三巻、七〇九頁)。

- (102) トレムセン出身でマリーン朝に仕えた法学者 (イブン・ハルドゥーン自伝 4)、六八―六九頁)。

- (103) ヒジュラ暦七四〇年の巡礼の期間は、西暦一二四〇年六月の一三―一五日であっ

た。

- (104) Abū al-ʿAbbās Ahmad ibn Idrīs al-Bijārī (一二五九―一六〇年以降没)。ビジャーヤのマリーク派法学者 (*Ibn Farḥūn al-Mālikī, al-Dibāj al-mudhahhab fī maʿrifat aṣṣūn ʿulamāʾ al-madhhab*, ed. Maḥmūd ibn Muḥyī al-Dīn al-Jannān, Beirut: Dār al-Kutub al-ʿIlmiyya, 1996, p. 138)。

- (105) アンダルス出身でマリーン朝に仕えた法学者 (イブン・ハルドゥーン自伝 4)、七〇―七一頁)。

- (106) 当時のマムルーク朝スルターンはナースィル・ハサン (在位一二四七―一三五一、一三五四―一三六一年) であった。

- (107) *risālat-hi al-nabawiyya*. この時の書簡はアブー・イナーンの直筆によるもので、同じく直筆の詩が添えられていた。また、詩の方はワクフとされて常に預言者ムハンマドの墓所で読み上げられるよう定められていたという (*Muḥammad al-Manūn, Waraqāt ʿan ḥadīṭat al-Marīṭiyyīn*, Rabat: Jamīʿat Muḥammad al-Khāmis, 1996, p. 220)。

- (108) al-Jāmīʿ al-Azhar: 九七〇年にファーティマ朝が新都カイロに建設した金曜モスク。アイユーブ朝の創始者サラーフッディーン (在位一一六九―一二九三年) がファーティマ朝を滅ぼしスンナ派体制を確立すると、同モスクでのフトバが廃止され、金曜モスクとしての機能が失われた。その後一二六七年、マムルーク朝第五代スルターン・バイバルス (在位一二六〇―一二七七年) の時代に施設の修復と新たなワクフ財の寄進がなされ、金曜モスクとして復活した。マムルーク朝時代を通じて同モスクでは様々な講義が開かれ、多数の教師・学生が集い活発な教育活動が行われるようになった (*Muḥammad ʿAbd Allāh ʿInān, Tārīkh al-Jāmīʿ al-Azhar*, 2nd ed., Cairo, 1958, pp. 110-135)。

- (109) 慈善行為の一環としてウラマーやスーフィーに手当を支給する行為はイスラーム世界の諸王朝において広く見られた (*Yacov Lev, Charity, Endowments, and Charitable Institutions in Medieval Islam*, Gainesville: University Press of Florida, 2005, pp. 13-20)。

- (110) カルカシャンディー『黎明』に同様の書簡が収録されている (*al-Qalqashandī, Subḥ al-a-shāʾ fī ṣināʾat al-ushūʿ*, 14 vols, Cairo: al-Hayʾat al-Misriyya al-ʿAmma lil-Kitāb, vol. 7, pp. 379-380)。

- (111) Akhu-hu. 公文書に書かれるスルターン自筆の認証署名 (*taʿjama*) で用いられる自称の一つ。自称は相手の地位や公文書の種類によって細かく定められており、「あなたの兄弟」は異国のムスリムの王に宛てた書簡で用いられた (谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー」著『高貴なる用語の解説』訳註 (c)』「史窓」六九号、二〇一二年、四九頁)。

- (112) 校訂註によると、この書簡を収録しているのはトプカプ宮殿博物館所蔵のアフメト三世写本 (Ahmet 3042) のみである。またバルクークの名前の後ろは空欄になっており、ここに彼のアラーム(代署)が書かれるとされる。
- (113) *Shahanshah*. ペルシア語で「諸王の王」の意。アッバース朝時代に尊称としてイスラーム世界に導入され、プワイフ朝時代よりしばしば用いられるようになる。マムルーク朝ではスルターン専用の特別な尊称とされた (Hasan al-Bāshā, *al-Aḡāb al-Islāmiyya fī al-tārīkh wa al-wahā'iq wa al-ḥikāh*, Cairo, 1989, pp. 353-354)。
- (114) *Iskandar al-zamān*. アレクサンドロス大王に由来する尊称。マムルーク朝第五代スルターン・バイバルスが用いて以降、マムルーク朝スルターンの尊称としてしばしば用いられるようになった。ただし、「アレクサンドロス (al-Iskandar)」[第二のアレクサンドロス (Iskandar al-thānī)]「二本角を持つ者 (Dhāt al-qarnayn)」などアレクサンドロス大王に由来する尊称はホラズムシャー朝など他の地域や王朝においても見られる (Hasan al-Bāshā, *al-Aḡāb*, pp. 158-160)。アレクサンドロス大王は『クルアーン』第八章第八三―九八節に登場する、陽の沈む処と陽の昇る処に住む民族を制圧したのち蛮人ヤージュジュとマージュジュを封じ込める防壁を建設した「二本角を持つ者」に比定され、敬虔な一神教の信徒にしてその布教者、あるいは預言者の一人と見なされるなど、イスラーム的な英雄と目された「アレクサンドロス伝承」『ズルカルナイン』『岩波イスラーム辞典』・山中由里子『アレクサンドロス変相』・古代から中世イスラームへ』名古屋大学出版会、二〇〇九年)。
- (115) *Malik al-Bahrāyn*. 二つの海とは、地中海 (Bahr al-Rūm) と紅海 (Bahr al-Qulzum) を指す (al-Qalqashandī, *Ṣubḥ*, vol. 6, p. 71)。
- (116) *Khadim al-Haramayn al-Sharīfayn*. アイユーブ朝の創始者サラフッディーンが尊称に用い、バイバルス以降のマムルーク朝スルターンも用いた。両聖都およびヒジャーズ地方に対する支配権の確立を志向した両王朝の政治姿勢を示している (Hasan al-Bāshā, *al-Aḡāb*, pp. 267-269)。
- (117) *Qasīm amīr al-mu'minīn*. カリフと政治権力を分け合う者の意。プワイフ朝のイラクとファールスの支配者マリク・ラヒーム (在位一〇四八―一〇五五年) が尊称として初めて用い、ヒジュラ暦七/一三世紀にはイスラーム世界の各地の有力君主が用いた。アッバース朝滅亡後にマムルーク朝スルターン・バイバルスがカイロにアッバース朝カリフ位を復活させると、バイバルスがこの尊称を用い、その後マムルーク朝スルターンの尊称として広く用いられるようになった (Hasan al-Bāshā, *al-Aḡāb*, pp. 204-206)。
- (118) スルターン・バルクークの父親で、チェルケス人。バルクークがアターベクの地位にあった時期に故国から呼び寄せ、一二三一年に兄弟親族を伴ってエジプトへ来た。同年息子バルクークのスルターン就任を見ることなく死去。彼の名前は、ここでは *Anas* と表記されているが、*Anas*、*Anas* と表記されることが多い。 (al-*Iḥwā'*, vol. 5, pp. 472-473; Ibn Taghribirdī, *al-Manhal*, vol. 2, p. 107; Ibn Hajar, *Inbā'*, vol. 1, p. 244)。
- (119) *al-Hadra*. マムルーク朝から他のイスラーム国家に送られる書簡において、相手の君主に対して用いられた尊称 (Hasan al-Bāshā, *al-Aḡāb*, pp. 262-263)。
- (120) *Qudwat al-muwahhidin*. マムルーク朝の外交文書でハフス朝君主に対して用いられる特別な尊称の一つ。同王朝がムワッヒド朝の後継者を自認することに由来する (al-Qalqashandī, *Ṣubḥ*, vol. 6, p. 65)。
- (121) 元来はアラブ遊牧民が行った略奪行為「ガズウ」を行う者の意であるが、イスラーム以後、異教徒に対する襲撃行為を意味するようになる。このため、ガズイーは異教徒に対する戦いを行う者に冠せられた名譽の称号として用いられるようになる (「ガズウ」「ガズイー」『岩波イスラーム辞典』)。
- (122) *Sayf jamā'at al-shakīrīn*. 同じくハフス朝君主に用いられる特別な尊称だが、意味は不明。書記の手引き書『黎明』の作者カルカシャンディーは、その意味をイブン・ハルドゥーンに尋ねたものの、彼も知らなかったと述べている (al-Qalqashandī, *Ṣubḥ*, vol. 6, p. 55)。
- (123) ハディースに依拠した表現。「イブン・ハルドゥーン自伝6」、四五頁、註四二参照。
- (124) これもハディースに依拠した表現 (牧野信也訳『ハディース イスラーム伝承集成』中央公論新社、二〇〇一年、第三巻、一六一頁)。
- (125) *al-Walawī*. イブン・ハルドゥーンの個人の尊称「ワリーユッディーン」(「宗教の友」の意) をニスバ (由来名) の形にしたもの。任命書など公文書において個人名を記載する場合、個人の尊称はこのようにニスバ形にして書かれた。
- (126) *gharb wasf wa-dār*. 形容詞 *gharb* は「故国を離れた」あるいは「一風変わった」の意。ここでは両方の意味で用いられている。
- (127) 校訂註によれば、バッシヤール・イブン・ブルド *Bashshār ibn Burd* の詩とされ、「人々よ、わが耳は部族の一つを情熱的に愛すもの」という上の句が省略されているとのこと。詩人バッシヤールについては、「イブン・ハルドゥーン自伝5」、九七頁、註四四参照。
- (128) ハフス朝とマムルーク朝の間の外交関係は当時絶えて久しかった。イブン・ハルドゥーンは家族をエジプトへ呼び寄せるためバルクークにこの書簡を書いてもらう一方で、自らハフス朝スルターンに手紙を書き、バルクークに外交使節を送り贈物をするよう助言した。このバルクークの書簡を持参したミクナッスィーなる人物の素性は不明であるが、マムルーク朝の公式の使者ではなく、この時イブン・ハ



ドゥーンが自らの手紙を届けるために送った人物と考えられる。ミクナースイーという名を考慮すると、ベルベル系ミクナース族もしくは都市メクネスと縁のあるマグリブ出自の人物であろう。なおハフス朝スルターンはこのイブン・ハルドゥーンの進言を受け、イブン・ハルドゥーンの家族とともにバルーククへの贈り物としてマグリブ産のアラブ馬を送ったが、後述のように船は沈没してしまったという (*al-Iḥḥar*, vol. 5, pp. 479-480)。

- (129) waqf. ワクフとは、店舗、賃貸住宅、土地など収益が見込める不動産物件（これをワクフ財源という）の所有者がその収益の一部ないし全部を一定の目的（これをワクフ対象という）に充てることを予め定めたうえで寄進する行為を指す。一定の目的とは、原則として宗教、公共、慈善的なものである必要があり、モスクやマドラサ、病院や救貧院の維持運営がそれに相当する。「ワクフ」は停止を意味するアラビア語で、寄進物件の財産として所有権の移動が永久に停止されることに由来する言葉である。それゆえ、ワクフとして寄進された物件は以後、売買・分割・譲渡などが禁止されるが、以下ではその所有権移動禁止の原則が破られている様子がイブン・ハルドゥーンによって語られている（「ワクフ」『岩波イスラーム辞典』：堀井聡江『イスラーム法通史』、一三三―一三四頁）。

- (130) Madrasat al-Qamhiya. フスターートのアムル・モスク近くにあるマールイク派のマドラサ。アイユーブ朝の創始者サラフッディーンが一二七〇年一〇月初めに建設し、ワクフを設定した。そのワクフ財源であるファイユーム地方の農地で収穫される小麦がマドラサの教授や学生たちに配給されたため、「小麦の（＝カムヒーヤ）学院」として知られることとなった。このマドラサには計四人の教授が置かれていた (Neil D. MacKenzie, *Ayubid Cairo: A Topographical Study*, Cairo, 1992, pp. 110-111; al-Maqrīzī, *al-Mawā'iz wa al-i'tihār fī dhikr al-khiṭai wa al-athār*, ed. Ayman Fu'ād Sayyid, 5 vols., London: Mu'assasat al-Furqān li-Turāth al-Islāmī, 2002-04, vol. 4, pp. 455-456)。

- (131) 前任の教授はアラムッディーン・スライマーン・ビサーティー 'Alam al-Dīn Sulaymān al-Bisāṭī' であった。イブン・ハルドゥーンと同マドラサでの最初の講義は七八六年サファル月二五日／一三八四年四月一八日のことであり、その講義にはイブン・ハルドゥーンのパトロンであるアルトゥンブガーの他、文武の高官や名士たちも参列したという (al-Maqrīzī, *Sulūk*, vol. 3, p. 513)。

- (132) マムルーク朝ではスンナ派四法学派それぞれから一名ずつ、計四人の大カーディーが任じられていたが、その序列はシャーフイー派、ハナフイー派、マールイク派、ハンバル派の順であった (Joseph H. Escovitz, *The Office of Qāḍī al-Qūḍā in Cairo under the Bahī Mamlūks*, Berlin, 1984, p. 25)。イブン・ハルドゥーンがマールイク派を第四位と見なした理由は不明である。

- (133) マムルーク朝の四人の大カーディーは各々複数の代理裁判官 (*nuwwab*) を任命し、カイロ市内において法務を代行させていた。代理裁判官たちは市内のモスクやマドラサなどで裁判を行った (Escovitz, *The Office of Qāḍī al-Qūḍā*, pp. 132-33)。その数は時代が下るに従って増加していき、マムルーク朝末期のカイロでは一〇〇人を超えた (三浦徹「マムルーク朝末期の都市社会：ダマスクスを中心に」『史学雑誌』九八巻一号、一九八九年、八頁)。

- (134) 一二六五年にマムルーク朝でスンナ派四法学派から大カーディーが任命されるようになった当初は、四人の大カーディーが各々エジプトの各地に代理裁判官を任命していたが、一二七九一八〇年以降この権限はシャーフイー派大カーディーのみに与えられるようになった (Escovitz, *The Office of Qāḍī al-Qūḍā*, p. 24)。

- (135) マールディー、湯川武訳『統治の諸規則』慶應義塾大学出版会、二〇〇六年、一六八頁にカーディーの遺言執行に関する職務内容が解説されている。

- (136) 前任のマールイク派大カーディーはジャマールッディーン・アブドゥッラフマーン・イブン・ハイル Jamāl al-Dīn 'Abd al-Rahmān ibn Khayr al-Ma'likī。マールイク派の法学者たちが彼の下した判決が誤りであると非難したことがきっかけで七八六年ジュマター・アーヒラ月三日／一三八四年七月二三日に解任された (al-Maqrīzī, *Sulūk*, vol. 3, p. 517)。

- (137) *khīṭa*. しばしば「名譽の衣」「恩賜の衣」「賜衣」と訳出される、衣服および織物、武器、防具、馬具、装飾品の総称で、上位者が下位者に対して何らかの職務を授与する際の証として与えた物品を指す。ヒラール・サービー、谷口淳一・清水和裕監訳『カリフ宮廷のしきたり』松香堂、二〇〇三年、九二―九六頁を参照。

- (138) Bayn al-Qasrayn. 「二つの宮殿の間」の意で、かつてのファティマ朝の宮殿には含まれた大通り。マムルーク朝時代には多くの宗教・教育施設が立ち並ぶカイロの目抜き通りとなった。

- (139) al-Madrasa al-Salhiya. アイユーブ朝第七代スルターン・サーリフ・ナジウムッディーン (在位一二四〇～四九) が建設した、エジプトで初めてスンナ派四法学派の講義が開かれたマドラサ。一二四二年六月一日に建設開始、一二四二年一〇月二日に完成、一二四三―四四年に四法学の講義が置かれた。サーリフが一二四九年に没した後、彼の墓廟が併設された (MacKenzie, *Ayubid Cairo*, pp. 123-124; al-Maqrīzī, *Khīṭa*, vol. 4, pp. 485-494)。マムルーク朝時代に入り四法学派から大カーディーが任じられるようになると、このマドラサが四大カーディーの法廷兼任居とされた (Escovitz, *The Office of Qāḍī al-Qūḍā*, p. 133)。

- (140) イブン・ハルドゥーンのマールイク派大カーディー職就任は七八六年ジュマター・アーヒラ月一九日／一三八四年八月八日のこと。マクリースイーは、この任命はアルトゥンブガーの仲介により実現したと伝える (al-Maqrīzī, *Sulūk*, vol. 3, p. 517)。

イブン・ハルドゥーンの伝える前述の「側近の大物の一人」とはこのアルトゥンブガーであろうか。

- (141) 以下、カイロの司法界の腐敗振りをあげつらうイブン・ハルドゥーンの記事については、森本公誠『イブン・ハルドゥーンの見たエジプトの司法界』『藤本勝次・加藤一朗両先生古希記念 中近東文化史論叢』関西大学文学部、一九九二年、一四〇―一五〇頁の訳文を参考とした。

- (142) イスラーム法では、文書よりも証言に大きな証拠能力を認めており、専門の職業集団である公証人が裁判や婚姻・売買等日常の契約において証人の役割を果たした。彼らは様々な契約文書の作成を行うとともに、必要に応じてその文書の有効性を証言した（「公証人」『岩波イスラーム辞典』）。彼らは市中に店を構え、文書作成や裁判での証人を務めることで手数料を得ていた（Toru Miura, “Urban Society in Damascus as the Mamluk Era was Ending,” *Mamluk Studies Review*, vol. 10, no. 1, 2006, p.165; 『歴史序説』第二巻、九六―九八頁）。

- (143) *hakim*. この文章で言うところの「カーディー」は四大学派それぞれの大カーディーを指し、ハーキムは裁判官全般のことを指す。なお森本公誠『イブン・ハルドゥーンの見たエジプトの司法界』一三九頁では、カーディー（大カーディー）を「法官」とし、ハーキムを「司法監督官」としている。

- (144) *zakīya*. 裁判の際に証言する証人が法定の適格要件を満たしているか、すなわちアドル（「有徳」「公正」の意）であるかを、その証人が住む居住区内の住民に対して聞き取り調査を行う。この手続きをタブキヤという（堀井聡江『イスラーム法通史』、九二―九三頁）。

- (145) アヤソフィヤ写本には *ahl al-fuṣṣā*（ファトワーの徒）として記載があり、この読みに従った。なおファトワーの徒は「ムフタイ」と同義であるとみなした。ファトワーには法的な拘束力はないが、裁判の際、自らの主張の正当性を示し、カーディーが判決を下す際に参考とする証拠の一つとして用いられるため、訴訟に当たっては原告、被告ともにファトワーを請求したのである。ファトワーについては註六六参照。

- (146) 校訂テキストでは *khbra*（経験）とあるが、アヤソフィヤ写本に従い、*hayra*（困惑）と読む。

- (147) 原語の *madad* は「支援」という意味であるが、仏訳、森本訳に従い、「ムフタイーによるこの種の悪しき行為への支援」を「悪弊」と訳出した。森本公誠『イブン・ハルドゥーンの見たエジプトの司法界』一四七頁参照。

- (148) *zawāya*「修道場」と訳出したこの施設は、スーフィーや聖者の修行、宗教儀礼遂行の場として、また聖者の墓廟が置かれることによる参詣の場として機能した。人々は、そこで修行に励む聖者やスーフィーによる神へのとりなし、あるいは彼

らを通じて「バラカ」と呼ばれる神の恩恵が与えられることを期待し、こうした場を訪れたのである（「ザーウィヤ」『岩波イスラーム辞典』）。

- (149) 似たようなハディースは多々ある。例えば、牧野信也訳『ハディース イスラーム伝承集成』、第六巻、二〇六―二〇七頁を参照。

- (150) 『クルアーン』第六八章第二五節。啓示を嘘偽りと見なす者、やたらと誓いを立てる者、やたらと人を中傷し、悪口を言いふらす者などの逸話に出てくる文言で、イブン・ハルドゥーンはクルアーンを引用しつつ自らの正当性と中傷者たちの不当な振る舞いを際立たせているのである。

- (151) 「神よ、私はあなたに現世と来世における健康（*al-ṣiḥya*）を求めます」というハディースが念頭に置かれているものと思われる。例えば *Abū Dāʿūd, Sunan Abī Dāʿūd*, 7 vols., ed. Shuʿayb al-Arnawū, Damascus: Dār al-Risāla al-ʿAlamiyya, 2009, vol. 7, p. 408 を参照（*ibid.*）。